

工事請負契約約款第26条第5項（単品スライド条項）
運用マニュアル

令和5年2月

横 浜 市

目次

第1章 総論.....	1
1-1 全体スライド条項、インフレスライド条項と単品スライド条項.....	1
1-2 対象工事.....	1
1-3 対象品目.....	1
1-3-1 対象品目の選定の考え方.....	1
1-3-2 スライド額の算定の対象とする品目.....	2
1-4 請負代金額の考え方.....	2
1-5 スライド額算定.....	3
1-5-1 スライド額算定の方法について.....	3
1-5-2 部分払を行った場合の対象数量について.....	6
1-6 全体スライド条項及びインフレスライド条項併用時の特例.....	7
1-7 その他.....	8
第2章 鋼材類.....	9
2-1 対象材料.....	9
2-1-1 対象材料の考え方.....	9
2-1-2 その他市場単価・土木工事標準単価の扱い等.....	10
2-2 対象数量.....	10
2-3 請負人への確認事項.....	12
2-4 単価（実勢価格の算定）.....	13
2-4-1 変動前の価格の決定方法.....	13
2-4-2 変動後の実勢価格の決定方法.....	13
2-4-3 変動後の実勢価格の算出方法.....	15
2-5 購入価格の評価方法.....	15
2-6 変動額の算定.....	15
2-7 計算例.....	16
第3章 燃料油.....	17
3-1 対象材料.....	17
3-2 対象数量.....	17
3-2-1 対象数量の考え方.....	17
3-2-2 対象数量の算定方法.....	18
3-2-3 その他.....	18
3-3 請負人への確認事項.....	19
3-4 単価（実勢価格の算定）.....	20
3-4-1 変動前の価格の決定方法.....	20
3-4-2 変動後の実勢価格の決定方法.....	20
3-4-3 変動後の実勢価格の算出方法.....	21
3-5 購入価格の評価方法.....	22
3-6 変動額の算定.....	22
3-7 算出例.....	23

3-7-1 各種資材の運搬に係る燃料油の算出方法	23
3-7-2 機材運搬に係る燃料油の算出方法	24
3-7-3 直接工事費に計上される運搬費	26
3-7-4 計算事例	27
第4章 その他の主要な工事材料	29
4-1 対象材料	29
4-1-1 対象材料の考え方	29
4-1-2 その他市場単価・土木工事標準単価の扱い等	29
4-2 対象数量	30
4-3 請負人への確認事項	32
4-4 単価（実勢価格の算定）	34
4-4-1 変動前の価格の決定方法	34
4-4-2 変動後の実勢価格の決定方法	34
4-5 購入価格の評価方法	34
4-6 変動額の算定	34
第5章 請求等手続き及び提出様式	35
5-1 請求時期	35
5-2 協議の手続き	35
5-3 出来形部分検査	37
5-4 部分引渡しにかかる指定部分の取り扱い	37
 (参考資料)	
単品スライド条項にかかる実施フロー及び様式	38
単品スライド条項取扱要綱に定められている様式	39
第1号様式（第10条第1項）：工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額の変更請求書	40
第1号様式の1（第10条の1第1項第1号）：工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額の変更請求書	41
第2号様式（第10条第5項）：工事請負契約約款第26条第8項の規定に基づく協議開始日について（通知）	42
第2号様式の1（第10条の1第1項第3号）：工事請負契約約款第26条第8項の規定に基づく協議開始日について（通知）	43
第3号様式（第13条第1項）：工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額変更確認書	44
第4号様式（第13条第1項）：請書	45
単品スライド条項に係る参考様式	46
【様式1-1】請負代金額変更請求概算計算書	47
【様式2-1】請負代金額変更請求額計算書	48
【様式2-2】請負代金額の変更の対象材料計算総括表	49
【様式2-3】各種資機材の材料証明書	50
【様式2-4】建設機械の貨物自動車等による運搬にかかる運搬金額計算総括表（提出資料）	51
【様式2-5】重建設機械の分解、組立及び輸送にかかる運搬金額計算総括表（提出資料）	52
【様式2-6】仮設材（鋼矢板、H形鋼、覆工板等）の運搬にかかる運搬金額計算総括表（提出資料）	53
【様式3-1】工事請負契約約款第26条第5項の対象材料内訳表	54

【様式3-2】スライド調書	55
【様式3-3】物価の変動に基づくスライド額計算書	56
単品スライド条項に係る参考様式（様式1-1～様式2-6の記載例）	57
【様式1-1】請負代金額変更請求概算計算書	58
【様式2-1】請負代金額変更請求額計算書	59
【様式2-2】請負代金額の変更の対象材料計算総括表	60
【様式2-3】各種資機材の材料証明書	61
【様式2-4】建設機械の貨物自動車等による運搬にかかる運搬金額計算総括表（提出資料）	62
【様式2-5】重建設機械の分解、組立及び輸送にかかる運搬金額計算総括表（提出資料）	63
【様式2-6】仮設材（鋼矢板、H形鋼、覆工板等）の運搬にかかる運搬金額計算総括表（提出資料）	64
単品スライド条項に係る出来形部分検査の参考様式	65
工事出来形部分検査申請書	66
工事出来形部分検査結果通知書	67
別紙-1	
単品スライド額選定の考え方 概略フロー	68
実際の購入金額の確認フロー	69

（注）本資料の取り扱いについて

本マニュアルは、単品スライド条項の運用について発注者の認識の共有化を図るため、土木工事における一般的な考え方を令和5年2月段階で整理したものである。

必要に応じ、今後、本内容についても適宜追加・修正を行うことがある。

第1章 総論

1-1 全体スライド条項、インフレスライド条項と単品スライド条項

・全体スライド条項は、請負契約後1年を経過した後に賃金水準や物価水準が変動した場合、インフレスライド条項は、日本国内において急激なインフレーション又はデフレーションといった短期的で急激な変動が生じた場合の中間修正的な変更であるのに対し、単品スライド条項は特定の主要な工事材料の価格が著しく変動した場合の精算的な変更である。

- ・全体スライド条項は、請負契約後1年を経過した後に賃金水準や物価水準が変動した場合、インフレスライド条項は、日本国内において急激なインフレーション又はデフレーションといった短期的で急激な変動が生じた場合の中間修正的な変更であり、直接工事費の変更に連動して諸経費等の変更を含むものである。
- ・単品スライド条項は、特定の主要な工事材料の価格が著しく変動した場合の精算的な変更である。すなわち、対象となる材料価格の変動のみが請負代金額変更の要素となるものであり、材料費の変動に連動して共通仮設費、現場管理費及び一般管理費等の変更を行うものではない。

1-2 対象工事

・残工期が2か月以上ある全ての工事を対象とする。

- ・単品スライド条項の請求は、当該請求の際に残工期（部分引渡しに係る工事部分の残工期を含む）が2か月以上ある場合に限り、行うことができる。

1-3 対象品目

1-3-1 対象品目の選定の考え方

・対象品目は、鋼材類、燃料油、その他の主要な工事材料とする。
・各対象品目の対象材料については、請負人から請求があった材料の中から発注者と請負人とが協議して決定する。

- ・工事請負契約約款の第26条第5項に、「主要な工事材料の日本国内における価格に著しい変動を生じ、請負代金額が不相当となったと認められるとき」とされていることから、公共工事において使用している頻度の高い主要な材料を対象とする。
- ・これは、通常合理的な範囲を超える価格の変動分を、請負人のみの負担とするのは適切ではないという考え方のもと、単品スライド条項の趣旨を適切に踏まえたことによるものであり、価格変動がある材料全てが単品スライド条項の適用対象とはならない点に留意が必要である。
- ・なお、対象となる材料については、請負人から請求があった材料の中から発注者と請負人とが協議して決定するものであり、請求のない材料まで対象とする趣旨ではないことにも留意が必要である。

1-3-2 スライド額の算定の対象とする品目

- 各工事においてスライド額の算定の対象となるのは、品目毎の変動額（増額分又は減額分）が請負代金額の1%を超える品目とする。
- 個々の工事において、工事の総額に及ぼす影響が現に大きいことが必要条件となり、品目毎の変動額が請負代金額の1%を超える場合について、その品目をスライド額の適用対象とする。
- つまり、鋼材類、燃料油、その他の主要な工事材料の変動額の合計額が請負代金額の1%を超えるものを適用対象とするのではなく、鋼材類を例にとれば、その変動額だけで請負代金額の1%を超えている場合には鋼材類が適用対象材料になるという趣旨である。
- なお、「品目毎」とは、鋼材類、燃料油、その他の主要な工事材料で区分し、その他の主要な工事材料の区分は「第4章 その他の主要な工事材料」によるものとする。

1-4 請負代金額の考え方

- 部分払をした工事における「請負代金額」は、当該工事の請負代金額から当該部分払の対象となった出来形部分又は工事現場に搬入済みの工事材料若しくは製造工場等にある工場製品（以下「出来形部分等」という。）に相応する請負代金相当額を控除した額とする。
- 出来形として既に部分払を行った部分については、特段の条件がない限り、発注者と請負人との間で数量及び金額について合意を完了しているものであることから、単品スライド条項の請求対象となる工事においても、その部分まで遡って単品スライド条項を適用できないことには変わりはない。
- ただし、通常は、対象材料の価格の変動により請負代金額が不相当となることが判明する時点、すなわち、工事がかかり進捗した時点で単品スライド条項の適用請求を行うこととなるのが一般的であるため、単品スライド条項の適用請求までの間に部分払が行われることもあり得る。このような場合に対処するため、今後部分払を行う際には、発注者又は請負人の要請に基づき、部分払を行う部分についても今後の単品スライド条項の請求対象とすることができることとしている。（第5章 請求等手続き及び提出様式によるものとする。）
- また、部分引渡しを行う部分についてはその部分に係る精算を完了させる必要があることから、その部分のみを一つの工事として扱い単品スライド条項を適用することとなる。その際の請負代金額は部分引渡しを行う部分に係る請負代金額となるが、部分払を既に行っている出来形部分（特段の規定を設けたものを除く）が請求対象外となるのは、通常の工事と同様である。
- このような考え方は、請負代金額だけでなく、スライド額の算定の対象とする数量についても適用される。

1-5 スライド額算定

1-5-1 スライド額算定の方法について

- ・「スライド額」とは、材料価格の変動に伴う変動額のうち、請負代金額の1%を超える額とする。
- ・それぞれの品目毎の変動後の金額は、実勢価格に基づき算出した額と実際の購入金額とのどちらか低い方とする。ただし、請負人が実際の購入金額が適当な購入金額であることを証明する書類を示し、実際の購入金額が適当な購入金額であると認められる場合にあつては、実際の購入金額が実勢価格に基づき算出した額よりも高い場合でも、実際の購入金額とする。

① スライド額算定式（実勢価格）

- ・1-3により対象となった鋼材類、燃料油、その他の主要な工事材料のそれぞれの品目毎の請負代金の変更額（以下「スライド額」という。）の算定は、主要な工事材料に該当する各材料（以下「対象材料」という。）の単価等に基づき、次式により行う。

$$S_{\text{増額}}^{\ast} = (M_{\text{鋼}}^{\text{変更}} - M_{\text{鋼}}^{\text{当初}}) + (M_{\text{油}}^{\text{変更}} - M_{\text{油}}^{\text{当初}}) + (M_{\text{材料}}^{\text{変更}} - M_{\text{材料}}^{\text{当初}}) - P \times 1/100$$

$$S_{\text{減額}}^{\ast} = (M_{\text{鋼}}^{\text{変更}} - M_{\text{鋼}}^{\text{当初}}) + (M_{\text{油}}^{\text{変更}} - M_{\text{油}}^{\text{当初}}) + (M_{\text{材料}}^{\text{変更}} - M_{\text{材料}}^{\text{当初}}) + P \times 1/100$$

※税抜き額を万円未満切り捨てとする

$$M_{\text{鋼}}^{\text{当初}}, M_{\text{油}}^{\text{当初}}, M_{\text{材料}}^{\text{当初}} = \{p_1 \times D_1 + p_2 \times D_2 + \dots + p_m \times D_m\} \times k \times (1 + \text{消費税及び地方消費税の税率}/100)$$

$$M_{\text{鋼}}^{\text{変更}}, M_{\text{油}}^{\text{変更}}, M_{\text{材料}}^{\text{変更}} = \{p'_1 \times D_1 + p'_2 \times D_2 + \dots + p'_m \times D_m\} \times k \times (1 + \text{消費税及び地方消費税の税率}/100)$$

$S_{\text{増額}}$ ：スライド額（増額変更の場合）

$S_{\text{減額}}$ ：スライド額（減額変更の場合）

$M_{\text{鋼}}^{\text{変更}}, M_{\text{油}}^{\text{変更}}, M_{\text{材料}}^{\text{変更}}$ ：価格変動後の鋼材類、燃料油又はその他の主要な工事材料の金額

$M_{\text{鋼}}^{\text{当初}}, M_{\text{油}}^{\text{当初}}, M_{\text{材料}}^{\text{当初}}$ ：価格変動前の鋼材類、燃料油又はその他の主要な工事材料の金額

p ：2-4、3-4、4-4の規定に基づき算定した設計時点における鋼材類、燃料油又はその他の主要な工事材料に該当する各材料の単価

p' ：2-4、3-4、4-4の規定に基づき算定した価格変動後における鋼材類、燃料油又はその他の主要な工事材料に該当する各材料の実勢価格

D ：2-2、3-2、4-2の規定に基づき鋼材類、燃料油又はその他の主要な工事材料に該当する各材料について算定した対象数量

k ：落札率（総価契約単価合意方式の場合は、単価合意比率。（変更前の官積算単価に対する合意単価の比率をいう。）以下同じ。）

P ：請負代金額

(増額変更の場合の計算例)

計算例1		請負代金額：220,000,000		1%相当額：2,200,000	
各品目	各材料	価格変動前の金額	価格変動後の金額	変動額	対象判定
燃料油	軽油	1,000,000	1,200,000	200,000	×
	ガソリン	500,000	600,000	100,000	
	合計	1,500,000	1,800,000	300,000	
鋼材類	異形棒鋼	5,000,000	7,500,000	2,500,000	○
	H形鋼	1,000,000	1,400,000	400,000	
	合計	6,000,000	8,900,000	2,900,000	
スライド額 $S = 2,900,000 - 2,200,000 = 700,000$					

注) 価格は税込み

計算例2		請負代金額：110,000,000		1%相当額：1,100,000	
各品目	各材料	価格変動前の金額	価格変動後の金額	変動額	対象判定
燃料油	軽油	5,000,000	6,500,000	1,500,000	○
	ガソリン	500,000	600,000	100,000	
	合計	5,500,000	7,100,000	1,600,000	
鋼材類	異形棒鋼	5,000,000	7,000,000	2,000,000	○
	H形鋼	1,000,000	1,400,000	400,000	
	合計	6,000,000	8,400,000	2,400,000	
スライド額 $S = 1,600,000 + 2,400,000 - 1,100,000 = 2,900,000$					

注) 価格は税込み

- 単価合意比率について、精算変更時に追加された細別（レベル4）は落札率を用いるものとする。
※ 対象となる品目の考え方は1-3-2スライド額の算定の対象とする品目による。
- ② 実際の購入金額が $M_{鋼}^{変更}$ 、 $M_{油}^{変更}$ 又は $M_{材料}^{変更}$ を下回る場合について
 - 請負人が、2-5、3-5、4-5の規定に基づき、各対象材料を実際に購入した際の代金額を品目毎に合計した金額（消費税等相当額を含む。）を算定し、これら実際の購入金額が $M_{鋼}^{変更}$ 、 $M_{油}^{変更}$ 又は $M_{材料}^{変更}$ を下回る場合にあっては、①のスライド額算定式の規定にかかわらず、 $M_{鋼}^{変更}$ に代えて請負人の鋼材類の実際の購入金額を、 $M_{油}^{変更}$ に代えて請負人の燃料油の実際の購入金額を、 $M_{材料}^{変更}$ に代えて請負人のその他の主要な工事材料の実際の購入金額を用いて、①のスライド額算定式によりスライド額を算定する。
 - なお、実際の購入金額が採用される場合に落札率（単価合意比率）を乗じないのは、既に落札率（単価合意比率）が乗じられた請負代金額の範囲内で請負人が購入したものにまで落札率（単価合意比率）を乗じるのは適当ではないとの考えによるものである。
- ③ 実際の購入金額が $M_{鋼}^{変更}$ 、 $M_{油}^{変更}$ 又は $M_{材料}^{変更}$ を上回る場合について
 - 請負人が鋼材類、燃料油又はその他の主要な工事材料について、実際の購入金額が適当な購入金額であることを証明する書類を示し、実際の購入金額が適当な購入金額で

あると認められる場合にあつては、実際の購入金額が $M_{鋼}^{変更}$ 、 $M_{油}^{変更}$ 又は $M_{材料}^{変更}$ を上回る場合であっても、①のスライド額算定式の規定にかかわらず、 $M_{鋼}^{変更}$ に代えて請負人の鋼材類の実際の購入金額を、 $M_{油}^{変更}$ に代えて請負人の燃料油の実際の購入金額を、 $M_{材料}^{変更}$ に代えて請負人のその他の主要な工事材料の実際の購入金額を用いて、①のスライド額算定式によりスライド額を算定する。

- なお、実際の購入金額が採用される場合に落札率（単価合意比率）を乗じないのは、②と同様である。
- この場合におけるスライド額算定の手順は以下のとおりとする。
（参考フローは別紙－1 参照）

1) 請負人からの申し出

- 請負人は実際の購入金額により価格変動後の金額を算定することを希望する場合は、対象品目及び対象材料を発注者に申し出るものとする。その際、請負人は対象材料毎に実際の購入金額の単価が実勢価格の単価（落札率（単価合意比率）を考慮）を上回ることを確認するものとする。
- 請負人から申し出があった場合、発注者は対象材料の当該地域における価格上昇の状況やその原因等について請負人から情報提供を求めるものとする。

2) 実際の購入金額が適当な購入金額であることを証明する書類

- 実際の購入金額が適当な購入金額であることを証明する書類は、購入実績を証明する書類に加え、原則として、当該地域での市場取引価格が確認できる2社以上の見積りとする。その際、実際の購入先の見積りは含まないものとする。

<見積りの留意事項>

- 見積りの提出は、工期内の代表的な月（1か月以上）とし、工事全期間の提出は要しない。
- 見積りの有効期間は、実際の購入金額の単価と比較するため、実際に「現場に搬入された月もしくは購入した月」を含むものとする。
- 地域条件や工事材料の性質等で購入先以外から見積りを徴することができない場合や、購入先を含まない見積りが1社となる場合は、メタサーチサイト等により、当該材料の取扱業者等の所在地により近隣で対応可能な業者が限られることを確認したうえで、実際の購入先への注文時の見積りも含めるものとする。

（「近隣」については、生コンクリートを例にすると、日平均気温が25度以上の場合は運搬時間が1時間半以内の地域とする等、工事材料の性質に応じて設定する。）

3) 価格変動後の金額の算定

<第1段階>

- 請負人から提出された見積りから地域の材料価格の傾向と実際の購入金額での検討を行うことの妥当性を確認する。
- 具体的には、対象材料毎に実際の購入金額の単価と2社以上の見積り単価を比較し、実際の購入金額が最も安価であることを確認する。
- 確認にあたっては、材料が現場に搬入された月もしくは材料を購入した月のうち、代表的な月（1か月以上）の単価で確認する。
- 第1段階において、実際の購入金額が最も安価であることを確認した材料は第2段階に移行する。実際の購入金額が最も安価とならない材料については、実勢価格にて価格変動後の金額を算定するものとする。

<第2段階>

- 材料毎に工事全体期間を対象に実際の購入金額の単価と実勢価格の単価（落札率（単価合意比率）を考慮）を比較して実際の購入金額の妥当性を確認する。
- 妥当性の目安は、実勢価格の単価（落札率（単価合意比率）を考慮）＋30％とする。

（確認時の留意事項）

- 複数の月に現場へ搬入・購入した場合の実勢価格の単価（落札率（単価合意比率））は、各搬入月の単価を搬入・購入月毎の搬入数量で加重平均した単価とする。実際の購入金額の単価についても同様に購入単価を搬入・購入月毎の搬入数量で加重平均した単価とする。
- 実勢価格の単価は以下のとおりとする。
 - 鋼材類：「現場に搬入された月」の物価資料の価格（落札率（単価合意比率）を考慮）
 - 燃料油：「購入した月の翌月」の物価資料の価格（落札率（単価合意比率）を考慮）
 - その他主要な工事材料：鋼材類に準じるものとするが、燃料油のように契約と購入がほとんど同時期に行われる材料については燃料油に準じる
- 実際の購入金額の単価が、実勢価格の単価（落札率（単価合意比率）を考慮）＋30％以内である場合は、実際の購入金額の単価は概ね材料価格の上昇傾向と合致していると判断し、実際の購入金額にて価格変動後の金額を算定するものとする。
- なお、実勢価格の単価（落札率（単価合意比率）を考慮）の＋30％は発注者として妥当性を確認するためのものであり、＋30％を超えても妥当性が確認されれば採用可能とし、請負人から提出された証明書類の金額が実勢価格に対し大幅に乖離している場合は、発注者は特別に考慮すべき価格変動要因がないかを確認する。
（大幅に乖離している場合の確認時の留意事項）
- 発注者による見積りの徴収、近隣工事における材料の調達状況の確認、また、特別調査により単価設定している場合は特別調査を行った調査機関への問い合わせ等により、発注者が入手できる情報・資料から証明書類の金額の妥当性を確認するものとする。
- 発注者による確認の結果、証明書類の金額の妥当性を確認できない場合は、実勢価格によりスライド変動額を算定するものとする。

4) 減額変更の場合

- 発注者が減額変更を請求した場合で発注者が算定したスライド額に対し請負人が異議を申し立てたときも同様の取り扱いとする。

1-5-2 部分払を行った場合の対象数量について

• 部分払を行っている場合は、当該部分払の対象となった出来形部分に係る数量を除いた数量を設計数量とする。

- 出来形部分に係る数量の算出方法は、次のいずれかとする。

- ① 出来形部分について再積算を実施して出来形に該当する金額を算出した資料より、出来形部分に該当する数量を算出。
- ② 出来形に相応する請負代金額相当額と請負代金額との割合に、対象数量を乗じることで概算的に数量を算出。*

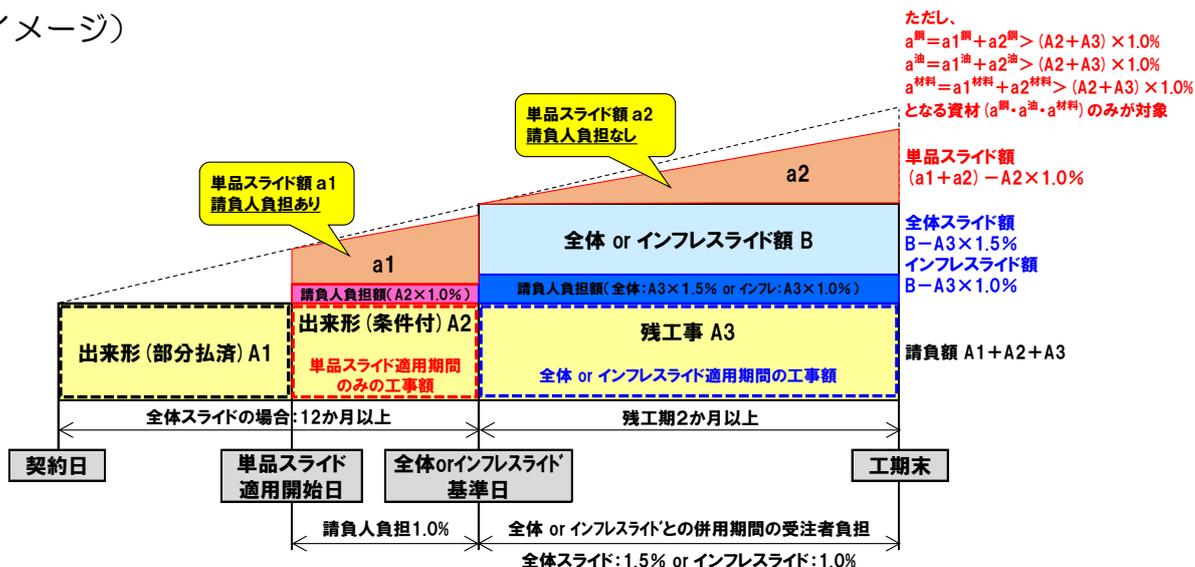
※ 部分払の額は、出来形に相応する請負代金額相当額の10分の9以内の額とされており、「部分払の額＝出来形に相応する請負代金額相当額」ではないので注意すること。

1-6 全体スライド条項及びインフレスライド条項併用時の特例

- 全体スライド条項及びインフレスライド条項のみによるスライド額を算定の上で、その対象とはならない価格上昇を単品スライド条項で反映することは可能。
 - 全体スライド条項及びインフレスライド条項と単品スライド条項とを併用した期間においては、単品スライド条項の変動前の単価は全体スライド条項及びインフレスライド条項の適用日の単価を用いるものとし、単品スライド条項に係る請負人負担は求めない。
 - 単品スライド条項の発動の可否を判断するために1%を乗じる請負代金額には、全体スライド条項及びインフレスライド条項のスライド額を含む。
- 全体スライド条項及びインフレスライド条項は、材料価格を含む物価や賃金等の変動に伴う価格水準全般の変動について対応するものであることから、単品スライド条項の適用となっている材料を含めて、まず全体スライド条項及びインフレスライド条項によるスライド額を算出することが基本となる。その上で、全体スライド条項及びインフレスライド条項との重複を防止するため、全体スライド条項及びインフレスライド条項の対象とした数量については、変動前の単価を全体スライド条項及びインフレスライド条項の適用日の単価として単品スライド条項のスライド額を算出することとなる。
 - また、全体スライド条項及びインフレスライド条項と単品スライド条項とをそれぞれ単独で考えれば、前者においては請負代金額における残工事費の1.5%もしくは1%、後者においては請負代金額の1%、それぞれで請負人の負担が生じることとなる。両スライドのルールをそのままそれぞれ適用した場合には、請負人にリスクを重複して負担させることになり、結果的にリスク負担が過大なものとなる。
 - このような過大なリスク負担を回避するため、単品スライド条項のみが適用される期間においては当該期間の工事費の1%を請負人の負担とするが、全体スライド条項及びインフレスライド条項と単品スライド条項が併用されている期間においては、全体スライド条項及びインフレスライド条項の適用により請負人が負担する請負代金額における残工事費の1.5%もしくは1%をもって既に単品スライド条項に係るリスク負担がなされているとの考え方に基づき、単品スライド条項に係る1%分の負担を求めないこととした。
 (全体スライド時には1.5%の請負人負担、インフレスライド時には1%の請負人負担を適用し、単品スライドでは請負人負担を考慮しない)
 - ただし、1-3で述べたように、単品スライド条項に係る請負代金額は基本的には最終的な請負代金額であるため、単品スライドの適用可否を判断するために1%を乗じる請負代金額は、全体スライド条項及びインフレスライド条項に係るスライド額を含む変更後の総額とする。

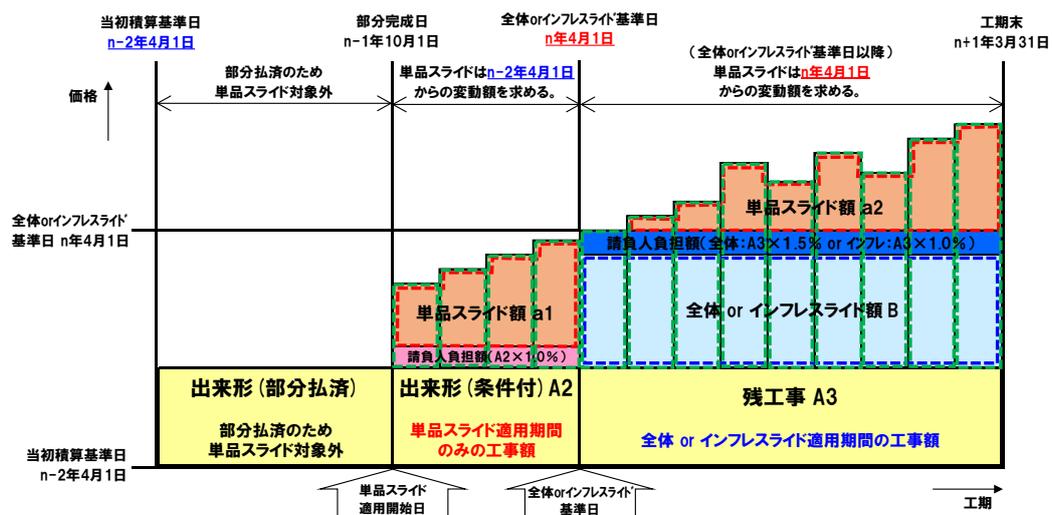
全体・インフレスライドと単品スライドの併用（請負代金額・請負人負担の例）

（全体イメージ）



注) 1-4のとおり、単品スライド条項の請負代金額は、最終的な全体工事費から、部分払を行った出来形部分や部分引渡しを行った部分を除いたもの。

（補足：単品スライド額の対象イメージ）



注) 全体もしくはインフレスライドと併用する場合は、全体もしくはインフレスライドに基づく設計変更契約を先に行う。また、変動額算定に用いる当初設計時点の実勢価格は、全体もしくはインフレスライドの基準日の単価を用いる。

1-7 その他

・情報公開の取り扱いについて

・単品スライドの証明資料について開示請求があった場合には、社内書類も開示する方針である。

第2章 鋼材類

2-1 対象材料

2-1-1 対象材料の考え方

- H形鋼、異形棒鋼、厚板、鋼矢板、鋼管杭、鉄鋼二次製品、ガードレール、スクラップ等、鋼材を主材料として構成されている材料を対象とする。
- ただし、コンクリート二次製品等に含まれる鋼材類は対象としない。

- 鉄鉱石や石炭等の原材料の高騰を要因として、鋼材の価格が短期間で急激に変動することがあり得ることから、鋼材を主材料として構成されている材料を対象としたものであり、具体的には、いわゆる鋼材類（H形鋼、異形棒鋼、厚板、鋼矢板、鋼管杭等）の他、鉄鋼二次製品（ロックボルト等）、鋼材から加工された道路用資材や橋梁用資材の一部（ガードレールやPCより線等）、スクラップ等を対象とする。
- しかしながら、鋼材類を一部に含むコンクリート二次製品等については、そのに含まれる鋼材類に係る部分のみを分離して価格を算出することが困難であることから、対象材料とはしない。（しかしながら、設計図面に配筋図等が明記されているなど、その必要数量が明らかになっており、かつ、単価・購入価格、購入先及び搬入時期が証明されること等により変動額の妥当性が客観的に評価できれば、対象材料となる可能性が排除されるものではない。）
- なお、非鉄金属（アルミニウム、鉛、金、銀、銅、ニッケル等）は価格変動の要因が鋼材のそれとは異なることもあり、単品スライドの対象とする場合は鋼材類には含まず、「その他の主要な工事材料」として整理するものとする。

対象材料一覧（例）

材料	資材名称（例）	規格（例）	単位
鋼板	鋼板（販売）	厚板 無規格 $12 \leq t \leq 25$	t
鋼管杭	鋼管杭	SKK400	t
鋼製矢板	鋼矢板	SY295	t
棒鋼	鉄筋コンクリート用棒鋼	SD345 D16~25	t
形鋼	H形鋼	広幅 SS400 150×150	t
PC 鋼線	PC鋼より線	SWPR7A 7本より線 A種	kg
防護柵	転落防止柵	H1100 根入長=200 (CO 建込)	m
ライナープレート	ライナープレート（円形）	メッキ仕上げ 3,000mm t=4.0mm	m
鉄鋼二次製品	摩擦接合用高力ボルト（六角）	F10T M22×100	組

2-1-2 その他市場単価・土木工事標準単価の扱い等

①市場単価・土木工事標準単価

- ・鋼材類を使用し、市場単価・土木工事標準単価（以下、「市場単価等」という。）を用いて積算している工種において、鋼材に係る材料費が分離できる場合には対象とすることができる。
- ・ただし材料費が分離できない市場単価等でも、設計図書に数量が記載されている場合は対象とすることができる。

- ・工種毎の単価が示されている市場単価等において、鋼材類の材料費が分離できる構成となっている場合は、その材料費の変動に伴う工事価格の変動を把握することが可能であることから、対象とすることができる。（国土交通省の「工事請負契約書第26条第5項（単品スライド条項）運用マニュアル」を参照）
- ・なお、市場単価等が材料費を分離できない構成となっているものは、材料費のみを別途算出することは不可能であるが、設計図書に鋼材類が明示されている場合は、その数量については対象とすることができる。この場合、市場単価等に代えてその材料の実勢価格または実際の購入価格を変動前、変動後の価格として変動額を算出するものとする。また、購入価格、購入先及び購入時期が証明されることが必要であるのは、市場単価等以外の場合と同様である。

②賃料・損料（リース料金）等の取り扱い

- ・鋼材類の賃料・損料についても対象とすることができる。

- ・リース契約の鋼材類についても、同一要因による鋼材の価格上昇に伴って、リース料や不足弁償金の上昇があり得ることから、購入する場合と同様に対象とすることとする。なお、一度リース契約を結んだものは契約途中でその価格が変更されることはないため、当該材料のリースを始めた月の価格とする。また、複数の月でリースを開始している場合は、他の材料と同様にその数量に応じて加重平均することにより算出した単価に設計数量を乗じることなど、当初及び変更後の価格の設定については注意が必要である。

2-2 対象数量

- ・鋼材類については、原則、発注者の設計図書の数量を対象とするが、発注者の設計数量の範囲内で、加工によるロス等の数量についても加味することができる。なお、このロス分を対象数量とする場合は、ロス分についてスクラップ等で売却する金額についても適切に処理する。
- ・任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種は、発注者の設計数量を対象数量とすることを基本とする。

① 基本事項

- ・鋼材類については、原則、数量総括表や図面等、設計図書に明示されている数量を対象数量とする。この数量について請負人が購入価格、購入先及び購入時期について証明できない場合は、当該材料はスライドの対象としない。
- ・また、実際の工場現場では鋼材を加工するためにロスが生じることから、実際に購入した数量のうち、発注者の設計数量（設計図書で明示されている数量×（1＋ロス率））までは、対象数量とすることができる。ロス率については、土木工事標準積算基準書によることとする。

証明された数量と対象数量の考え方

証明数量 < 設計図書の数量	→ 当該材料は対象材料とならない
設計図書の数量 ≤ 証明数量 ≤ 設計数量	→ 対象材料。対象数量は証明数量
設計数量 < 証明数量	→ 対象材料。対象数量は設計数量

注) 設計図書の数量：設計図書（数量総括表や図面等）に記載されている数量
設計数量：設計図書の数量にロスを加えた数量（積算上の数量）
証明数量：請負人から証明された数量

- このようなロス分（異形棒鋼は除く）については、積算上スクラップとして売却することとなっており、ロス分を計上する場合は、スクラップも対象材料として売却金額の上昇分を計算に含めることにより、変動額を適切に設定することが必要である。このため、ロス分を対象数量とするよう請求があった場合は、発注者は請負人に対してスクラップについても対象材料とするよう申し入れるものとする。協議が成立しない場合は、対象数量の設定方法の見直し（例えば、ロス率が見込まれる対象数量を設計数量ではなく設計図書の数量とする等）や、スクラップを対象材料として単価の適切な設定（スクラップの単価は、実勢価格の工期の平均値と、請負人が当該工事に該当するとして一部提出したスクラップの売却単価の最大値との高い方の値）などの措置を講じることが必要である。

② 任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種の取り扱い

- 任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種については、請負人が必ずしも発注者が想定した工法で実施せず、使用する鋼材類の種類や数量が発注者の想定と異なっていることが通常あり得る。このような工種について請負人からの請求があった場合は、発注者の設計数量を対象数量とすることを基本とする。

③ 減額変更する場合の取り扱い

- 減額変更する場合において、発注者が有する情報に基づき変動後の価格を算定する場合は、発注者の設計数量を対象数量とする。
- 発注者が算定したスライド額に対し請負人が異議を申し立てたときの数量の取り扱いは①、②に準じるものとするが、証明数量が設計図書の数量を下回る場合（証明数量 < 設計図書の数量）は、発注者の設計数量を対象数量とする。

④ その他

- 部分払を行っている場合は、当該部分払の対象となった出来形部分に係る数量を除いたものを設計数量とする。
- 設計数量に含まれる鋼材スクラップの売却益（マイナス控除額）については、対象品目に合わせて単品スライドの対象として取り扱うものとする。なお、鋼材スクラップの売却益については検収が困難であることから、実勢価格での算定を基本とし、実際の売却額とはしない。

2-3 請負人への確認事項

- 鋼材類は、材料の取引形態に照らし対象数量全量の搬入等の時期、購入先、単価・購入価格を確認することが可能であるため、それが証明できる納品書、請求書、領収書の提出を請負人に求めること。
- 増額変更において、必要な書類が提出されないなど具体的な証明がなされない場合は、その材料は単品スライド条項の対象材料としない。
- 減額変更において、異議申し立てがない場合や、異議申し立てがあり必要な書類が提出されないなど具体的な証明がなされない場合は、発注者が算定したスライド額を請負代金額の変更額とする。
- ただし、鋼材類を実際に購入した際の単価及び購入先を証明する書類を請負人が提出し難い事情があると認められる場合においては、当該対象材料の搬入等の月及び数量を証明する書類の提出を求めるものとする。

① 基本事項

- 単品スライド条項は、対象とする材料が当初の想定と比べ、実際に購入した時期に著しく価格が変動したために請負代金額の変更をしようとするものであるため、この条項に基づくスライド額の算定に当たっては、実際の購入時期や購入価格が請負人に証明されることが前提となる。
- このため、材料の取引形態に照らし数量、価格等の入手実態が明確な鋼材類については、対象数量全量の搬入等の時期、購入先及び購入価格を証明する書類として、納品書、請求書、領収書の全てを提出してもらい、購入実態を的確に把握することが必要である。(ミルシートは鋼材類の品質を証明する書類であり、当該工事で購入した材料の数量等を証明できない場合があるが、当該工事の数量、納品時期が証明できる場合は、納品書に替えることができる。)
- 下請企業等が購入している場合は、その企業の書類(納品書、請求書、領収書)で問題ないが、施工体制台帳等で当該企業がその工事に従事していることを別途確認すること。
- 必要な証明書類が提出されない場合や提出された書類の信憑性がない場合など、現場への搬入時期等を確認できない材料は単品スライド条項の対象材料としない。これは、品目毎に実勢価格を用いて算出した変動後の価格と実際の購入価格のどちらか安い方の金額を採用することとしているが(1-5-1参照)、鋼材については購入価格と数量を証明することが可能であるため、実際の購入価格が安い場合でも書類の提出を義務づけることによって、スライド額が実際よりも高いものとなることを回避する意味がある。ここでいう材料とは規格毎の材料という意味であり、搬入時期等を確認できない材料があったとしても規格が異なる他の材料まで単品スライド条項の対象材料としないという趣旨ではない。
- ただし、例えばメーカー等から鋼材類を購入する際に購入先との基本契約で購入価格を漏洩しない旨を契約条項として設定している場合など、実際に購入した際の単価及び購入先を証明する書類を請負人が提出し難い事情があると認められる場合においては、購入先や単価等の証明書類を省略し、当該対象材料の搬入等の月及び数量を証明する書類の提出を求めるものとする。この場合、実際に購入した際の単価は、搬入等した月の実勢価格(対象材料を複数の月に現場へ搬入等した場合にあっては、搬入した月毎の実勢価格を搬入した月毎の搬入数量で加重平均した価格)を用いてスライド額を算定することができる。

- ② 任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種の取り扱い
 - ・任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種に対する請求があり、かつ、請負人の実際の施工が発注者の想定と異なる場合は、請負人の施工に必要なとなった材料の搬入時期を証明する書類をもって証明できることとする。
- ③ 鋼材類の「搬入」の取り扱い
 - ・鋼材類の「搬入」とは、工事現場に直接搬入される場合のみならず、鋼橋製作などのように工場に直接搬入される場合もあるが、その場合の搬入時期は工場に搬入される時期とする。
- ④ 減額変更する場合の取り扱い
 - ・減額変更する場合においては、施工計画書に定められている計画工程表等の発注者が有する情報に基づき変動後の価格を算定することとするため、請負人に対し、請負人が対象材料を実際に購入した際の数量、単価及び購入先並びに当該対象材料の搬入等の月を証明する書類の提出は求めないものとする。
 - ・ただし、発注者が算定したスライド額に対し請負人が異議を申し立てたときは、発注者は請負人に対し、請負人が対象材料を実際に購入した際の数量、単価及び購入先並びに当該対象材料の搬入等の月を証明する書類の提出を求めるものとする。

2-4 単価（実勢価格の算定）

2-4-1 変動前の価格の決定方法

・変動前の価格を算出するための単価は、設計時点における単価とする。

- ・設計時点における単価は、予定価格を算出する際に用いた単価とする。設計変更を実施した場合も同様に変更金額を算出するために用いた単価とし、新規工種については発注者の指示時点の単価とする。
- ・一般的に請負人は、自らが当初想定した金額を根拠に単品スライド条項を請求するものと考えられるが、請負人の想定した金額の妥当性を客観的に証明することは実態上困難であることから、変動前の価格は発注者の想定した金額とするものである。
- ・ただし、単価合意を実施し、その内訳として材料の単価が予め提出されている場合は、その単価を変動前の単価とすることができる。

2-4-2 変動後の実勢価格の決定方法

- ・価格変動後の価格の算定に用いる実勢単価は、対象材料が現場に搬入された月の物価資料の価格とする。
- ・物価資料に掲載されていない材料は、当初積算時の類似単価の物価変動率により算定することができる。ただし、当該材料等の工事費全体に占める割合が大きい場合は、別途考慮する。

① 物価資料等により実勢価格を設定する場合

- ・鋼材類の販売形態は、「ひも付き」といわゆる「店売り」に区分され、それぞれ毎に物価資料等に掲載されている。
- ・ひも付きの鋼材類の場合、一般的に鉄鋼メーカーから現場や工場に納入される2か月前におおむね購入契約が行われていることから、その結果は現場に搬入された月と同月の物価資料等により実勢価格として掲載されている。

- 一方、店売りの場合は、納入の概ね1か月以上前に購入契約は完了しており、その結果は現場に搬入された月と同月の物価資料等の実勢価格として掲載されている。

時期	6月	7月	8月
資材 (ひも付き)	● 契約(価格決定)		←現場搬入→
資材調達 (店売り)	● 契約(価格決定)		←現場搬入→
価格調査 の流れ	 調査機関		8月号

② 特別調査や見積り等による場合

- 当初積算が特別調査や見積りによる材料など、既存の物価資料に価格が掲載されていない場合は、過去の価格に遡って特別調査や見積りを実施することが困難であることから、当初積算時の類似資材の物価変動率により算定することができる。ただし、当該材料等の工事費全体に占める割合が大きい場合は、発注者による見積りの徴収、近隣工事における資材の調達状況の確認、また、特別調査により単価設定している場合は特別調査を行った調査機関への問い合わせを行う等により、別途考慮する。

鋼材類の価格決定

価格採用順	設計時点での価格決定方法	スライド単価の決定方法
1	土木工事資材等単価表による場合	当該月の設定単価により単価を設定する。
2	物価資料に掲載がある場合	当該月の物価資料により単価を設定する。
3	特別調査(半年毎、臨時調査)による場合	当初積算時の類似資材の物価変動率により算定することができる。ただし、当該材料等の工事費全体に占める割合が大きい場合は、発注者による見積りの徴収、近隣工事における資材の調達状況の確認、また、特別調査により単価設定している場合は特別調査を行った調査機関への問い合わせを行う等により、別途考慮する。
4	見積りによる場合	

③ 減額変更する場合の取り扱いについて

- 減額変更する場合において、発注者が有する情報に基づき変動後の価格を算定する場合は、施工計画書に定められている計画工程表等の情報に基づき当該対象材料の搬入等の月及び月毎の搬入数量を設定する。

2-4-3 変動後の実勢価格の算出方法

・月毎の搬入数量に応じて加重平均して算出した価格に、対象数量を乗じて算出する。

- ・価格変動後の価格を算定する場合には、各月毎の数量が必要となるが、購入時期までを拘束していない設計書の性格上、発注者は対象数量の月毎の内訳を想定することが困難である。このため、請負人が実際に材料を購入した状況に応じ、複数の月に現場に対象材料が搬入された場合については、加重平均により平均的な単価を決定し、対象数量を乗じて、変動後の価格を算出することとする。
- ・このような手法を採用するのは、対象数量と購入数量が同じであればどちらの数量を用いても結果に変わりはないが、対象数量と購入数量が異なる場合でも的確に変動後の価格を算出できるようにするためである。

2-5 購入価格の評価方法

・対象材料における購入数量が対象数量と同数の場合は、実際の購入金額とする。
・購入数量が対象数量より多い場合は、「実際の購入金額×対象数量÷購入数量」で算出する。

- ・鋼材類においては、対象材料となる場合は、対象数量より多い数量の搬入時期等が証明された場合である。対象数量と購入数量が同数の場合の購入金額は請負人が実際に購入した金額とする。しかし、購入数量が対象数量より多い場合は、実際の購入金額のうち、スライド額の算定の対象にできる対象数量にかかる部分のみを購入したと考えた場合の金額である。

2-6 変動額の算定

・1-5の算定式に基づき、変動額を算出する。

2-7 計算例

(落札率 95%の工事の場合)

設計単価 (円)	70,000
設計図書の数 (t)	100

	●年 4 月	●年 5 月	●年 6 月
各月の実勢価格 (円)	74,000	78,000	83,000
購入時の価格 (円)	71,000	75,000	78,000
搬入時の数量 (t)	20	30	50

○価格変動前の金額

$$\begin{aligned}
 M_{\text{細}}^{\text{当初}} &= \text{設計時点の実勢価格} \times \text{対象数量} \times \text{落札率} \times (1 + \text{消費税率}) \\
 &= 70,000 \times 100 \times 0.95 \times 1.1 \\
 &= 7,315,000
 \end{aligned}$$

○価格変動後の金額

$$\begin{aligned}
 M_{\text{細}}^{\text{変更}} &= \text{搬入月の実勢価格 (加重平均)} \times \text{対象数量} \times \text{落札率} \times (1 + \text{消費税率}) \\
 &= (74,000 \times 20 + 78,000 \times 30 + 83,000 \times 50) \div (20 + 30 + 50) \times 100 \times 0.95 \times 1.1 \\
 &= 8,328,650
 \end{aligned}$$

○実購入額

$$\begin{aligned}
 M_{\text{細}}^{\text{変更}} &= (71,000 \times 20 + 75,000 \times 30 + 78,000 \times 50) \times 1.1 \\
 &= 8,327,000
 \end{aligned}$$

※ この場合は、価格変動後の金額 $M_{\text{細}}^{\text{変更}}$ は、実購入額を採用

○変動額

$$M_{\text{細}}^{\text{変更}} - M_{\text{細}}^{\text{当初}} = 8,327,000 - 7,315,000 = 1,012,000$$

第3章 燃料油

3-1 対象材料

・ガソリン、軽油、混合油、重油、灯油とする。

・該当する材料は、ガソリン、軽油、混合油、重油、灯油の5材料とする。例えば、潤滑油など燃料油でないものは対象材料とはしない。

3-2 対象数量

3-2-1 対象数量の考え方

・発注者の設計数量（V）を基本とする。
・設計数量（V）に含まれていない、現着単価で設定されている資材や機械の運搬に要する燃料についても、その数量の妥当性が客観的に確認できるものは対象数量とすることができる。

- ① 発注者の設計数量（V）にカウントされている数量（発注者の設計数量（V）内）
 - ・燃料油については設計図書に明示していないが、発注者の積算において、現場場内の建設機械や場外への運搬のためのダンプ等が稼働する際に必要な燃料油等として計上されている設計数量（V）を基本とする。
- ② 発注者の設計数量（V）にカウントされていない数量
 - ・現場に搬入される資材（現着単価で設定されている骨材・生 Co・As 合材等）や機械等（建設機械・仮設材・桁等（積算上、共通仮設費（率計上部分を含む）として計上されているものを含む）の運搬過程において燃料油が使用されている。この場合、燃料油の価格が分離できない構成で現着の単価や運搬費に含まれているため、対象数量とするためには、その中から燃料油に係る価格等の妥当性について発注者が客観的に確認できることが必要である。つまり、この数量については、価格等の妥当性が証明されることを条件としており、設計数量（V）に含まれている数量とは異なり、証明されないものは対象数量とならない。

○発注者の設計数量（V）内

① 現場場内建設機械（場外への運搬ダンプ等を含む）に使用した燃料類

○発注者の設計数量（V）外

② 現着単価で設定されている各種資材（骨材・生 Co・As 合材等）の運搬に要した燃料類

③ 共通仮設費（率及び積上げ）に含まれる建設機械等（建設機械・仮設材等）の運搬及び分解・組立に要した燃料類

- ③ 減額変更する場合の取り扱い
 - ・減額変更する場合において、発注者が有する情報に基づき変動後の価格を算定する場合は、発注者の設計数量を対象数量とする。

3-2-2 対象数量の算定方法

- 使用した燃料油のうち、主たる用途分については、請負人から購入時期や購入先、購入価格等を確認できる書類の提出がなされるものと考えられる。しかしながら、燃料油の使用形態は、非常に多岐にわたる機械で使用されるものであり、設計数量（V）の全数量に対して証明書類を求めるのは現実的ではないことから、設計数量（V）内としてカウントされている数量については書類による証明がなくとも単品スライド条項の対象数量とすることができる。

○設計数量（V）内の①のうち、主たる用途に用いた数量として、請負人からの証明がなされた数量（V1）

※ ただし、証明された数量（V1）が設計数量（V）を超えている場合は、 $V1 = \text{設計数量（V）}$ とする。なお、この場合、 $V2 = 0$

○設計数量（V）内の①のうち、主たる用途以外に用いた数量として、請負人からの証明がなされなかった数量（V2）

※ V2は請負人の算出した概算数量でよい。

ただし、【 $V1 + V2 \leq \text{設計数量（V）}$ 】の範囲内の数量とする。

○設計数量（V）外の②・③の燃料油数量（V3）

• 3-7「各種資材の運搬に係る燃料油の算出方法」・「機材運搬に係る燃料油の算出方法」により、各々算出した数量の合計値（V3）を対象数量とする。

ただし、合計値（V3）と、請負人の購入数量（証明がなされた数量）を比較し、購入数量が小さい場合は購入数量を対象数量とする。

3-2-3 その他

- 部分払を行っている場合は、当該部分払の対象となった出来形部分に係る数量を除いた数量を対象数量とする。

3-3 請負人への確認事項

- ・請負人は、請求しようとするスライド対象材料毎に、上記の対象数量の区分（①～③）毎に購入数量・購入価格等に係る書類を提出することが必要。
- ・増額変更において、必要な書類が提出されない場合など具体的な証明がなされない場合は、対象とはならない。
- ・減額変更において、異議申し立てがない場合や、異議申し立てがあり必要な書類が提出されない場合など具体的な証明がなされない場合は、発注者が算定したスライド額を請負代金額の変更額とする。

① 発注者の設計数量（V）内の燃料油（現場内建設機械（場外への運搬ダンプ等を含む）に使用した燃料油）

- ・購入した燃料類の「購入数量・単価・購入価格・購入時期・購入先」、および「購入数量を使用した建設機械と実施工程上の整合性」を証明する書類
- ・なお、やむを得ない理由により証明書類が提出できない「主たる用途以外に用いた数量（V2）」については、対象材料計算総括表 【様式2-2】

・この「主たる用途以外に用いた数量」とは、そもそも燃料油は非常に多岐にわたる機械で使用されているものであり、全数量について書類の提出を求めることは現実的ではないため、厳格に用途毎の数量の証明を義務づけることを意図したものではないことに留意されたい。このため、そもそも請負人として保存すべき書類として扱っていなかったため保存していない等のやむを得ない理由で書類が提出できない場合は、対象材料計算総括表を提出してもらうことでよい。

② 発注者の設計数量（V）外の現着単価で設定されている各種資材（骨材・生Co・As合材等）の運搬に要した燃料油

- ・購入した資材毎に「購入数量・購入価格・出荷元・搬入時期」、及び「運搬費の内燃料代」を証明する書類 【様式2-3】

③ 発注者の設計数量（V）外の共通仮設費（率及び積上げ）に含まれる建設機械等（建設機械・仮設材等）の運搬及び分解・組立に要した燃料油

- ・運搬した機材毎に「運搬機械・出荷元・運搬時期・運搬距離」、及び「運搬費用」、「運搬費の内燃料代」を証明する書類 【様式2-4】

④ 減額変更の場合の取り扱いについて

- ・減額変更する場合においては、施工計画書に定められている計画工程表等の発注者が有する情報に基づき変動後の価格を算定することとするため、請負人に対し、①～③の提出は求めないものとする。
- ・ただし、発注者が算定したスライド額に対し請負人が異議を申し立てたときは、発注者は請負人に対し、①～③の提出を求めるものとする。

3-4 単価（実勢価格の算定）

3-4-1 変動前の価格の決定方法

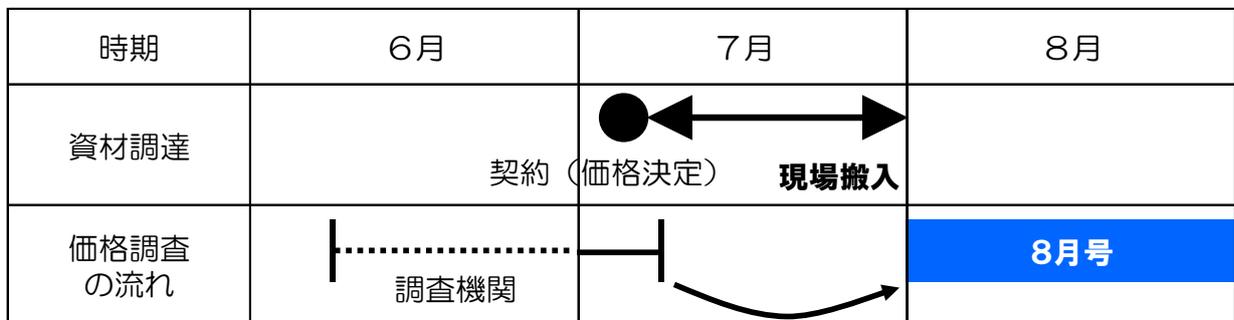
- 変動前の価格を算出するための単価は、設計時点における単価とする。
- 設計時点における単価は、予定価格を算出する際に用いた単価とする。設計変更を実施した場合も同様に変更金額を算出するために用いた単価とし、新規工種については発注者の指示時点の単価とする。設計変更を行った場合、特に燃料油は、同じ材料でも複数の時点の単価が設定されている場合が多いので注意が必要である。
- 鋼材類の場合と同様に、原則、変動前の単価は発注者の想定した単価とするが、単価合意を実施しており、その内訳として材料の単価が予め提出されている場合は、その価格とすることができる。

3-4-2 変動後の実勢価格の決定方法

- 証明書が提出された対象数量に関する価格変動後の価格の算定に用いる実勢単価は、対象材料を購入した翌月の物価資料の価格とする。
- 証明書が提出されていない場合には、工事期間の平均値（着手日が属する月の翌月から工期末が属する月の前々月までの各月における実勢価格の平均）とする。

① 基本事項

- 燃料油は、鋼材類とは異なり、契約と購入がほとんど同時期に行われるものであるため、現場で購入した翌月の物価資料等を実勢価格として掲載されている。
- ただし、対象材料の購入が工期末の月の場合、当該月の物価資料の価格を実勢価格とするものとする。



対象数量と単価の決定方法について

	発注者の設計数量 (V)	発注者の 設計数量外	単価の決定方法 (P')
証明書類の提出により、証明された数量	対象数量①の(V1) ※ 実際の証明数量が設計数量以上の場合：V1 = V	対象数量 ②・③ (V3)	各月の購入数量と実勢価格による加重平均とする
やむを得ない理由により証明書類が提出されない数量	対象数量①の(V2) V2 = V - V1 ※ 実際の証明数量が設計数量以上の場合：V2 = 0		着手日の翌月から工期末の前々月までの実勢価格の平均とする

※ 実勢価格：購入月の翌月の「物価資料等」の価格

② 減額変更の場合の取り扱いについて

- 減額変更する場合で、発注者が有する情報では購入月毎の購入数量が判断できない場合にあつては、着手日が属する月の翌月から工期末が属する月の前々月までの各月における実勢価格の平均価格とする。

3-4-3 変動後の実勢価格の算出方法

• 設計数量内の証明された対象数量 (V1) 及び設計数量外の資材や機材等の運搬に係る実際の燃料油に係る対象数量 (V3) にそれぞれ毎の購入数量に応じて加重平均処理された単価を乗じたものと、証明されていない対象数量 (V2) に工事期間中の平均単価を乗じたものとを合計して、変動後の実勢価格を決定する。

- 燃料油について、3-2のとおり様々な対象数量の設定方法があるため、その数量に応じて設定した単価をそれぞれ毎の数量に乗じて合計額を算出する。
- なお、V1、V2、V3が混在する場合、それぞれの数量にあたる価格を加重平均し、対象数量を乗じて算出することと同意義である。

3-5 購入価格の評価方法

- 証明された購入数量が、3-2-2の対象数量（V1およびV3）以上であった場合は、実際の購入金額のうち、対象数量分のみの金額とする。
- 証明されなかった数量（V2）については、3-4-2に基づき、発注者と同様に、工事期間の平均価格（着手日の翌月から工期末の前々月迄の実勢価格の平均価格）にV2を乗じた額とする。

- 請負人によって証明された購入数量が対象数量より多い場合は、実際の購入金額のうち、スライド額の算定の対象にできる対象数量のみを購入したと考えた場合の金額を購入金額とすることは、鋼材類と同様である。
- 証明されなかった数量については、請負人もその単価を明確に把握しているとは言い難いため、単価は発注者が設定する手法と同等の手法にて算出することとする。

3-6 変動額の算定

- 1-5の算定式に基づき、変動額を算出する。（鋼材類と同様）

3-7 算出例

3-2-2に記載したとおり、次の方法により算出した資材や機材等の運搬に係る燃料油の合計値（V3）よりも、該当する資材や機材等の運搬に係る実際の燃料油の購入数量の方が少ない場合は、V3は実際の購入数量とする。

3-7-1 各種資材の運搬に係る燃料油の算出方法

- 各種資材とは、当該工事において実勢価格が変動している主な資材である。
- 資材運搬に係る燃料費の購入数量・購入時期・購入先・購入価格が証明されたものを対象とする。その際には、次の計算式より対象数量を算出する。

$$Q^{*1} = L \div S \times (P \times K)^{*2} \div N1 \times N$$

※1：整数止めとし小数点以下切り捨て

※2：()の計算結果の有効数字第3位を四捨五入し、有効数字2桁

Q：燃料油数量（ℓ）

L：運搬距離（km） ※片道

【プラント及び工場等から現場までの距離
（最長10km）】

S：規制速度（km/h）

【各々で算出（原則40km/hとする）】

P：運搬機械の機関出力（kw）

【建設機械等損料算定表 参照】

K：時間当りの燃料消費率（ℓ/kw-h）

【土木工事標準積算基準書参照】

N1：運搬車1台当り資材数量（単位）

【積載量÷資材単位体積当たり重量】

N：搬入数量（単位）

【対象数量】

※ 運搬距離については、適正と認められる範囲内の距離とする。

【計算例】

資材：再生骨材（40mm級）現場着価	
運搬機械：10tダンプトラック	
L：運搬距離（km） ※片道	5 km
S：規制速度（km/h）	40 km/h
P：運搬機械の機関出力（kw）	246 kw
K：時間当りの燃料消費率（ℓ/kw-h）	0.043 ℓ/kw-h
N1：運搬車1台当り資材数量（m ³ ）	4.6 m ³
N：搬入数量（m ³ ）	5,000 m ³

$$Q = L \div S \times (P \times K) \div N1 \times N$$

$$Q = 5 \div 40 \times (246 \times 0.043) \div 4.6 \times 5,000 = 1,494 \ell$$

3-7-2 機材運搬に係る燃料油の算出方法

① 共通仮設費に計上される運搬費

- 共通仮設費率に含まれる運搬費 …… 単品スライド条項対象
- 積上げ項目による運搬費 …… 単品スライド条項対象
- 1) 質量20t以上の建設機械の貨物自動車等による運搬
 ◇ 基本運賃表より積算していることから燃料量を抽出することができないため燃料消費量より算出する。
- 2) 仮設材（鋼矢板、H形鋼、覆工板等）の運搬
 ◇ 基本運賃表より積算していることから燃料量を抽出することができないため燃料消費量より算出する。
- 3) 重建設機械の分解、組立及び輸送に要する費用
 ◇ 運搬費等の率（労務費・クレーン運転費の〇〇%）より積算していることから燃料量を抽出することができないため燃料消費量より算出する。

運搬費の燃料費で購入数量・購入時期・購入先・購入価格が証明されたものが対象。
 次の計算式より対象数量を算出する。

$$Q^{*1} = L \div S \times (P \times K)^{*2} \div N1 \times N$$

※1：整数止めとし小数点以下切り捨て

※2：()の計算結果の有効数字第3位を四捨五入し、有効数字2桁

- Q：燃料油数量（ℓ）
- L：運搬距離（km） ※片道（往復） 【各区役所から現場までの距離（最長10km）】
- S：輸送速度 30（km/h） 【土木工事標準積算基準書準用】
- P：運搬機械の機関出力（kw） 【建設機械等損料算定表参照】
- K：時間当りの燃料消費率（ℓ/kw-h） 【土木工事標準積算基準書参照】
- N：搬入搬出（回） 【搬入搬出回数】
- 運搬車両台数（台） 【運搬車両台数】

② 共通仮設費率に含まれる運搬費 運搬距離の起算点は各区役所とする。

【計算例】

建設機械：バックホウ0.8m ³ （運搬機械：20t 積トレーラ）	
L：運搬距離（km） ※片道	10 km
S：輸送速度（km/h）	30 km/h
P：運搬機械の機関出力（kw）	235 kw
K：時間当りの燃料消費率（ℓ/kw-h）	0.075 ℓ/kw-h
N：搬入搬出（回）	2 回

$$Q^{*1} = L \div S \times (P \times K)^{*2} \times N$$

※1：整数止めとし小数点以下切り捨て

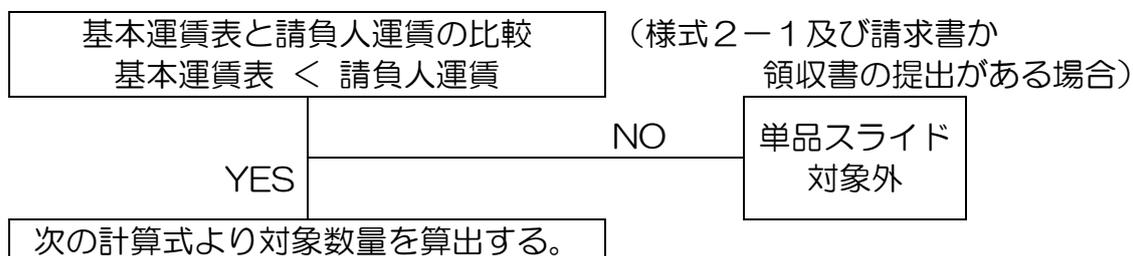
※2：()の計算結果の有効数字第3位を四捨五入し、有効数字2桁

$$Q = 10 \div 30 \times (235 \times 0.075) \times 2 = 12 \ell$$

③ 積上げ項目による運搬費

- 1) 質量20t以上の建設機械の貨物自動車等による運搬
- 2) 仮設材（鋼矢板、H形鋼、覆工板等）の運搬

運搬費の燃料費で購入数量・購入時期・購入先・購入価格が証明されたものが対象



【計算例】

建設機械：路面切削機（運搬機械：30t 積トレーラ）	
L：運搬距離（km） ※片道	10 km
S：輸送速度（km/h）	30 km/h
P：運搬機械の機関出力（kw）	235 kw
K：時間当りの燃料消費率（ℓ/kw-h）	0.075 ℓ/kw-h
N：搬入搬出（回）	2 回

$$Q^{*1} = L \div S \times (P \times K)^{*2} \times N$$

※1：整数止めとし小数点以下切り捨て

※2：（ ）の計算結果の有効数字第3位を四捨五入し、有効数字2桁

$$Q = 10 \div 30 \times (235 \times 0.075) \times 2 = 12 \ell$$

【計算例】

仮設材：H形鋼（運搬機械：20t 積トレーラ）	
L：運搬距離（km） ※片道	10 km
S：輸送速度（km/h）	30 km/h
P：運搬機械の機関出力（kw）	235 kw
K：時間当りの燃料消費率（ℓ/kw-h）	0.075 ℓ/kw-h
N：台数 5（台）×2（搬入搬出）	10 台

$$Q^{*1} = L \div S \times (P \times K)^{*2} \times N$$

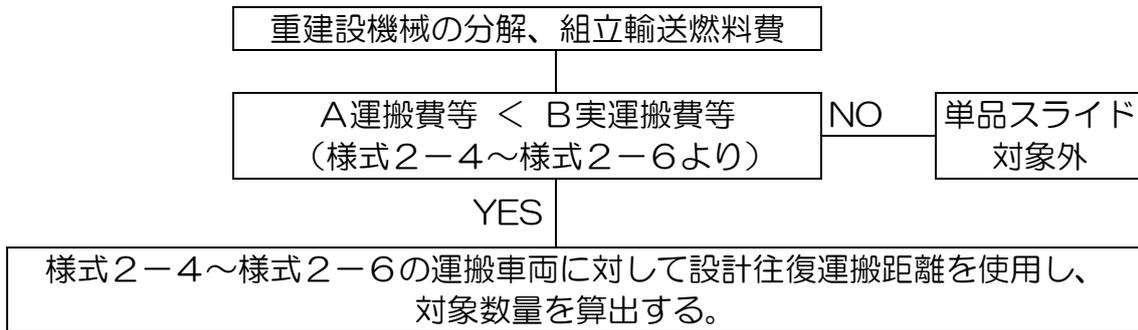
※1：整数止めとし小数点以下切り捨て

※2：（ ）の計算結果の有効数字第3位を四捨五入し、有効数字2桁

$$Q = 10 \div 30 \times (235 \times 0.075) \times 10 = 60 \ell$$

④ 重建設機械の分解、組立及び輸送に要する費用

運搬費の燃料費で購入数量・購入時期・購入先・購入価格が証明されたものが対象



運搬費等 = (労務費(特殊作業員) + クレーン運転費) × 運搬費等率
 詳細は、土木工事標準積算基準書参照

【計算例】

重建設機械の分解、組立 (ブルドーザ 21t 級以下)	
運搬車両 (セミトレーラ 20t・トラック 4t)	
L : 運搬距離 (km) ※ 往復	73 km
S : 輸送速度 (km/h)	30 km/h
P : 運搬機械の機関出力 (kw)	235 kw (セミトレーラ 20t)
	137 kw (トラック 4t)
K : 時間当りの燃料消費率 (ℓ/kw-h)	0.075 ℓ/kw-h (セミトレーラ)
	0.05 ℓ/kw-h (トラック)
N : 運搬車両台数 (台)	1 台

$$Q^{*1} = L \div S \times (P \times K)^{*2} \times N$$

※1 : 整数止めとし小数点以下切り捨て

※2 : () の計算結果の有効数字第3位を四捨五入し、有効数字2桁

$$Q = 73 \div 30 \times (235 \times 0.075) + 73 \div 30 \times (137 \times 0.05) = 60 \ell$$

3-7-3 直接工事費に計上される運搬費

① 鋼桁、工場製作品の運搬

- 鋼橋工場製作輸送費に示す回帰式 (土木工事標準積算基準書参照)
- 鋼橋工場製作輸送費に示す回帰式を用いて積算していることから燃料量を抽出することはできないことから燃料消費量より算出する。(算出は機材運搬に準ずる)

② 支給品及び現場発生品の運搬

- 対象数量に含まれている。(歩掛積算)

3-7-4 計算事例

【単品スライド（軽油+ガソリン）】の計算例

《軽油》

- ① 請負人の購入数量（現場内建設機械に係る数量）に対する設計数量（積算システムによる4~9月分の数量） 56,000L (A)
- ①' 請負人の購入数量（資機材運搬に係る数量）に対する設計数量（運用マニュアルによる算出値） 4,000L (B)

軽油	既済 (対象外)	既済 (対象外)	既済 (対象外)	購入 (証明済)	購入 (未証明)	購入合計							
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	計			
① 請負人の購入数量（現場内建設機械に係る数量） 【各月の購入数量】	-	-	-	5,000	10,000	15,000	14,000	5,000	1,000	50,000	5,000	55,000 (C)	
①' 請負人の購入数量（資機材運搬に係る数量） 【各月の購入数量】	-	-	-	1,000			1,500	500		3,000	-	3,000 (D)	
② 請負人の当該数量を購入した際の購入価格 (税込み)	90	90	100	90	100	100	100	110	100		95		
③ 発注者の購入月の実勢価格 (翌月の「物価資料等」の価格：税抜き)	80	90	90	90	90	100	110	120	110		95		
請負人の購入金額（現場内建設機械に係る金額） ①×②				450,000	1,000,000	1,500,000	1,400,000	550,000	100,000	5,000,000	475,000	5,475,000 (E)	
請負人の購入金額（資機材運搬に係る金額） ①'×②				90,000			150,000	55,000		295,000	-	295,000 (F)	
発注者の購入月の実勢金額 (①+①')×③				540,000	900,000	1,500,000	1,705,000	660,000	110,000	5,415,000	475,000	5,890,000 (G)	
発注者 スライド単価 p'	$p' = \Sigma (\text{購入数量} \times \text{実勢価格}) \div \text{購入数量} = (G) \div (C+D) =$											102 (H)	

- 現場内建設機械に係る対象数量（積算システムの数量と購入数量の小さい方） (A) > (C) より 55,000L (I)
- 資機材運搬に係る対象数量（運用マニュアル算出値と購入数量の小さい方） (B) > (D) より 3,000L (J)
- 請負人の現場内建設機械に係る購入金額は、(C)=(I)のため、(E)の金額を採用 5,475,000円 (K)
- 請負人の資機材運搬に係る購入金額は、(D)=(J)のため、(F)の金額を採用 295,000円 (L)
- 請負人の購入金額 (K)+(L)より 5,770,000円 (M)

《ガソリン》

- ① 請負人の購入数量（現場内建設機械に係る数量）に対する設計数量（積算システムによる4~9月分の数量） 8,000L (A)
- ①' 請負人の購入数量（資機材運搬に係る数量）に対する設計数量（運用マニュアルによる算出値） 1,000L (B)

ガソリン	既済 (対象外)	既済 (対象外)	既済 (対象外)	購入 (証明済)	購入 (未証明)	購入合計							
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	計			
① 請負人の購入数量（現場内建設機械に係る数量） 【各月の購入数量】	-	-	-	1,000	2,000	3,000	2,800	1,000	200	10,000	0	10,000 (C)	
①' 請負人の購入数量（資機材運搬に係る数量） 【各月の購入数量】	-	-	-		500	1,000	500			2,000	-	2,000 (D)	
② 請負人の当該数量を購入した際の購入価格 (税込み)	100	120	130	110	120	140	160	160	180				
③ 発注者の購入月の実勢価格 (翌月の「物価資料等」の価格：税抜き)	110	120	140	110	110	130	170	170	170				
請負人の購入金額（現場内建設機械に係る金額） ①×②				110,000	240,000	420,000	448,000	160,000	36,000	1,414,000	0	1,414,000 (E)	
請負人の購入金額（資機材運搬に係る金額） ①'×②					60,000	140,000	80,000			280,000	-	280,000 (F)	
発注者の購入月の実勢金額 (①+①')×③				110,000	275,000	520,000	561,000	170,000	34,000	1,670,000	0	1,670,000 (G)	
発注者 スライド単価 p'	$p' = \Sigma (\text{購入数量} \times \text{実勢価格}) \div \text{購入数量} = (G) \div (C+D) =$											139 (H)	

- 現場内建設機械に係る対象数量（積算システムの数量と購入数量の小さい方） (A) < (C) より 8,000L (I)
- 資機材運搬に係る対象数量（運用マニュアル算出値と購入数量の小さい方） (B) < (D) より 1,000L (J)
- 請負人の現場内建設機械に係る購入金額は、(C) > (I)のため、請負人の金額を調整
 $(I) / (C) \times (E) = 8,000 / 10,000 \times 1,414,000 = 1,131,200$ 円 (K)
- 請負人の資機材運搬に係る購入金額は、(D) > (J)のため、請負人の購入金額を調整
 $(J) / (D) \times (F) = 1,000 / 2,000 \times 280,000 = 140,000$ 円 (L)
- 請負人の購入金額 (K)+(L)より 1,271,200円 (M)

《单品スライド額》

单品スライド対象の請負代金額	P	55,000,000円(税込み)	※部分払いの対象となった出来形部分に 相応する請負代金相当額を除く
請負比率	k	0.9002367	消費税及び地方消費税の税率 10%
当初設計単価	p	軽油：80円、ガソリン：110円	
発注者 スライド単価	p'	軽油：102円、ガソリン：139円	
(1) M変更・油(発注者)		$\text{軽} : p' \quad \text{軽} (I) \quad \text{軽} (J) \quad \text{ガ} : p' \quad \text{ガ} (I) \quad \text{ガ} (J) \quad k \quad \text{消費税}$ $\{ 102 \times (55,000 + 3,000) + 139 \times (8,000 + 1,000) \} \times 0.9002367 \times (100 + 10) / 100 = 7,071,449$	
(2) M変更・油(請負人)		$\text{軽} (M) \quad \text{ガ} (M)$ $5,770,000 + 1,271,200 = 7,041,200$	
(3) M当初・油(発注者)		$\text{軽} : p \quad \text{軽} (I) \quad \text{軽} (J) \quad \text{ガ} : p \quad \text{ガ} (I) \quad \text{ガ} (J) \quad 0.0 \quad \text{消費税}$ $\{ 80 \times (55,000 + 3,000) + 110 \times (8,000 + 1,000) \} \times 0.9002367 \times (100 + 10) / 100 = 5,575,166$	
(4) 変更額 油		$(2) \quad (3)$ $7,041,200 - 5,575,166 = 1,466,034$	※单品スライド対象の請負代金額(P)に対して、1%以上の変動有り
单品スライド額	S	$(4) \quad P$ $1,466,034 - 55,000,000 \times 1\% = 916,034$	※S = 変動額 油 - P × 1% ※「軽油」と「ガソリン」は同品目であるため、品目の合計額に対して請負代金額の1%の切りを行う点に注意!!
单品スライド額(税抜き)	S'	$S \quad \text{消費税}$ $916,034 \times 100 / (100 + 10) = 832,758 \approx 830,000 \quad (\text{万円未満切り捨て})$	
单品スライド額(税込み)		$S' \quad \text{消費税}$ $830,000 \times (100 + 10) / 100 = 913,000$	

※ 「(1)M変更・油(発注者)」と「(2)M変更・油(請負人)」の金額を比較し、安価となる方を「(4)変動額 油」の計算に使用する。

ただし、実際の購入金額が適当な購入金額であることを示し、実際の購入金額が適当な購入金額であると認められる場合にあっては、実際の購入金額が実勢価格に基づき算出した額よりも高い場合でも、実際の購入金額とする。

第4章 その他の主要な工事材料

4-1 対象材料

4-1-1 対象材料の考え方

- ・アスファルト類、コンクリート類等の鋼材類、燃料油以外の主要な工事材料を対象とする。

① 基本事項

- ・石油や石炭等の原材料の高騰等により、アスファルト類、コンクリート類等の価格も短期間で急激に上昇しうることから、鋼材類、燃料油以外の主要な工事材料も対象としたものである。なお、アスファルト類、コンクリート類以外の主要な工事材料については、発注者と請負人とは協議して決定するものとする。
- ・スライド額の算定の対象とする品目の整理にあたっては、「アスファルト類」、「コンクリート類」で区分し、それ以外の主要な工事材料については、発注者と請負人とは協議して決定するものとする。

② アスファルト類

- ・アスファルト類の対象工事材料としては、アスファルト混合物、アスファルト乳剤、ストレートアスファルト、改質アスファルト等が想定されるが、対象材料については工事毎に発注者と請負人とは協議して決定するものとする。

③ コンクリート類

- ・コンクリート類の対象工事材料としては、レディーミクストコンクリート（生コン）、セメント、モルタル、コンクリート混和材、コンクリート用骨材、コンクリート二次製品等が想定されるが、対象材料については工事毎に発注者と請負人とは協議して決定するものとする。

4-1-2 その他市場単価・土木工事標準単価の扱い等

① 市場単価・土木工事標準単価

- ・アスファルト類、コンクリート類等の「鋼材類以外の主要な工事材料」を使用し、市場単価・土木工事標準単価（以下、「市場単価等」という。）を用いて積算している工種において、材料費が分離できる場合には対象とすることができる。
- ・ただし材料費が分離できない市場単価でも、設計図書に数量が記載されている場合は対象とすることができる。

- ・工種毎の単価が示されている市場単価等において、材料費が分離できる構成となっている場合は、その材料費の変動に伴う工事価格の変動を把握することが可能であることから、対象とすることができる。
- ・運用については鋼材類と同様の取り扱いとする。

4-2 対象数量

- 鋼材類以外の主要な工事材料についても、原則、発注者の設計図書の数量を対象とするが、発注者の設計数量の範囲内で、施工によるロス等の数量についても加味することができる。なお、このロス分を対象数量とする場合は、ロス分についてスクラップ等で売却する金額についても適切に処理する。
- 任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種は、発注者の設計数量を対象数量とすることを基本とする。

① 基本事項

- 鋼材類以外の主要な工事材料についても、原則、数量総括表や図面等、設計図書に明示されている数量を対象数量とする。この数量について請負人が購入価格、購入先及び購入時期について証明できない場合は、当該材料はスライドの対象としない。
- また、実際の工事現場では施工にあたってロスが生じることから、実際に購入した数量のうち、発注者の設計数量（設計図書で明示されている数量×（1+ロス率））までは、対象数量とすることができる。ロス率については、土木工事標準積算基準書によることとする。

証明された数量と対象数量の考え方

証明数量 < 設計図書の数量	→ 当該材料は対象材料とならない
設計図書の数量 ≤ 証明数量 ≤ 設計数量	→ 対象材料。対象数量は証明数量
設計数量 < 証明数量	→ 対象材料。対象数量は設計数量

注) 設計図書の数量：設計図書（数量総括表や図面等）に記載されている数量
設計数量：設計図書の数量にロスを加えた数量（積算上の数量）
証明数量：請負者から証明された数量

- ロス分を対象数量とするよう請求があった場合において、スクラップを売却可能な材料については、発注者は請負人に対してスクラップについても対象材料とするよう申し入れるものとする。協議が成立しない場合は、対象数量の設定方法の見直し（例えば、ロス率が見込まれる対象数量を設計数量ではなく設計図書の数量とする等）や、スクラップを対象材料として単価の適切な設定（スクラップの単価は、実勢価格の着手日から工期末の平均値と、請負人が当該工事に該当するとして一部提出したスクラップの売却単価の最大値との高い方の値）などの措置を講じることが必要である。
- ### ② 任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種の取り扱い
- 任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種については、請負人が必ずしも発注者が想定した工法で実施せず、使用する材料の種類や数量が発注者の想定と異なっていることが通常あり得る。このような工種について請負人からの請求があった場合は、発注者の設計数量を対象数量とすることを基本とする。

③ アスファルト類の取り扱い

- ・アスファルト類については、設計図書に舗装面積等としては示されてはいるが、舗装材の数量（重量）が示されていない場合が一般的である。積算上は、舗装材の数量は次式により計算されている。

（アスファルト混合物の重量）

$$\boxed{\text{面積} \times \text{厚さ} \times \text{締め固め後密度}^* \times (1 + \text{ロス率}^*)}$$

（アスファルト乳剤の散布量）

$$\boxed{\text{面積} \times \text{散布量}^*}$$

※ 締め固め後密度及びロス率、アスファルト乳剤散布量は設計で用いた数値を採用する。

④ コンクリート類の取り扱い

- ・施工パッケージ型積算基準を使用している場合の設計数量（設計図書の数量にロスを加えた数量）の算出例については、次のとおり。

$$\text{設計図書の数量} \times (\text{標準単価} \times \text{コンクリート構成比率} / \text{東京地区コンクリート単価})$$

⑤ 減額変更する場合の取り扱い

- ・減額変更する場合において、発注者が有する情報に基づき変動後の価格を算定する場合は、発注者の設計数量を対象数量とする。
- ・発注者が算定したスライド額に対し請負人が異議を申し立てたときの数量の取り扱いは①～④に準じるものとするが、証明数量が設計図書の数量を下回る場合（証明数量 < 設計図書の数量）は、発注者の設計数量を対象数量とする。

⑥ その他

- ・部分払を行っている場合は、当該部分払の対象となった出来形部分に係る数量を除いたものを設計数量とする。

4-3 請負人への確認事項

- 鋼材類以外の主要な材料も、基本的に材料の取引形態に照らし対象数量全量の搬入等の時期、購入先、単価・購入価格を確認することが可能であるため、それが証明できる納品書、請求書、領収書の提出を請負人に求めること。
- 増額変更において、必要な書類が提出されないなど具体的な証明がなされない場合は、その材料は単品スライド条項の対象材料としない。
- 減額変更において、異議申し立てがない場合や、異議申し立てがあり必要な書類が提出されないなど具体的な証明がなされない場合は、発注者が算定したスライド額を請負代金額の変更額とする。

① 基本事項

- 単品スライド条項は、対象とする材料が当初の想定と比べ、実際に購入した時期に著しく価格が変動したために請負代金額の変更をしようとするものであるため、この条項に基づくスライド額の算定に当たっては、実際の購入時期や購入価格が請負人に証明されることが前提となる。
- このため、材料の取引形態に照らし数量、価格等の入手実態が明確な材料については、対象数量全量の搬入等の時期、購入先及び購入価格を証明する書類として、納品書、請求書、領収書の全てを提出してもらい、購入実態を的確に把握することが必要である。
- 下請企業等が購入している場合は、その企業の書類（納品書、請求書、領収書）で問題ないが、施工体制台帳等で当該企業がその工事に従事していることを別途確認すること。
- 必要な証明書類が提出されない場合や提出された書類の信憑性がない場合など、現場への搬入時期等を確認できない材料は単品スライド条項の対象材料としない。これは、品目毎に実勢価格を用いて算出した変動後の価格と実際の購入価格のどちらか安い方の金額を採用することとしているが（1-4-1参照）、基本的に購入価格と数量を証明することが可能であるため、実際の購入価格が安い場合でも書類の提出を義務づけることによって、スライド額が実際よりも高いものとなることを回避する意味がある。ここでいう材料とは規格毎の材料という意味であり、搬入時期等を確認できない材料があったとしても規格が異なる他の材料まで単品スライド条項の対象材料としないという趣旨ではない。
- なお、鋼材類については、独自の商慣行に基づき、やむを得ない場合は一部証明書類の提出の省略を規定しているが、その他の主要な工事材料について、同等の事情があると認められる場合は、同規定を準用することができる。

② 任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種の取り扱い

- 任意仮設等、数量総括表に一式で計上されている工種に対する請求があり、かつ、請負人の実際の施工が発注者の想定と異なる場合は、請負人の施工に必要なとなった材料の搬入時期を証明する書類をもって証明できることとする。

③ 材料の「搬入」の取り扱い

- 材料の「搬入」とは、工事現場に直接搬入される場合のみならず、非鉄金属などのように工場に直接搬入される場合もあるが、その場合の搬入時期は工場に搬入される時期とする。

④ アスファルト類の取り扱い

- 自社内での取引であったため、納品書、請求書、領収書等が存在しない場合は、それに代わる社内書類で購入価格の証明を求めるものとする。
- また、請負人からの証明金額が工場渡しである場合は、運搬費に要した金額をあわせて証明を求めるものとする。
- ただし、運搬費用の算出が困難な場合には、燃料油と同様に計算式により算出するものとする。その際、物価資料（現着単価）と比較して安価な単価をスライド算定に用いるものとする。

⑤ 減額変更する場合の取り扱い

- 減額変更する場合においては、施工計画書に定められている計画工程表等の発注者が有する情報に基づき変動後の価格を算定することとするため、請負人に対し、請負人が対象材料を実際に購入した際の数量、単価及び購入先並びに当該対象材料の搬入等の月を証明する書類の提出は求めないものとする。
- ただし、発注者が算定したスライド額に対し請負人が異議を申し立てたときは、発注者は請負人に対し、請負人が対象材料を実際に購入した際の数量、単価及び購入先並びに当該対象材料の搬入等の月を証明する書類の提出を求めるものとする。

4-4 単価（実勢価格の算定）

4-4-1 変動前の価格の決定方法

- 変動前の価格を算出するための単価は、設計時点における単価とする。
- 設計時点における単価は、予定価格を算出する際に用いた単価とする。設計変更を実施した場合も同様に変更金額を算出するために用いた単価とし、新規工種については発注者の指示時点の単価とする。
- なお、一般的に請負人は、自らが当初想定した金額を根拠に単品スライド条項を請求するものと考えられるが、請負人の想定した金額の妥当性を客観的に証明することは実態上困難であることから、変動前の価格は発注者の想定した金額とする。
- ただし、単価合意を実施し、その内訳として材料の単価が予め提出されている場合は、その単価を変動前の単価とすることができる。

4-4-2 変動後の実勢価格の決定方法

- アスファルト類やコンクリート類等、契約と現場搬入の時期に差がある材料の価格変動後の価格の算定に用いる実勢単価は、鋼材類の変動後の実勢価格の決定・算出方法（2-4-2、2-4-3）に準じて対象材料が現場に搬入された月の物価資料の価格とする。
- これ以外の主要な工事材料においても、鋼材類に準じるものとするが、燃料油のように契約と購入がほとんど同時期に行われる材料については、燃料油の変動後の実勢価格の決定・算出方法（3-4-2、3-4-3）と同様に対象材料を購入した翌月の物価資料の価格とする。

4-5 購入価格の評価方法

- 対象材料における購入数量が対象数量と同数の場合は、実際の購入金額とする。
- 購入数量が対象数量より多い場合は、「実際の購入金額×対象数量÷購入数量」で算出する。
- 対象材料となる場合は、対象数量より多い数量の搬入時期等が証明された場合である。対象数量と購入数量が同数の場合の購入金額は請負人が実際に購入した金額そのものとする。しかし、購入数量が対象数量より多い場合は、実際の購入金額のうち、スライド額の算定の対象にできる対象数量にかかる部分のみを購入したと考えた場合の金額である。

4-6 変動額の算定

- 1-5の算定式に基づき、変動額を算出する。（鋼材類と同様）

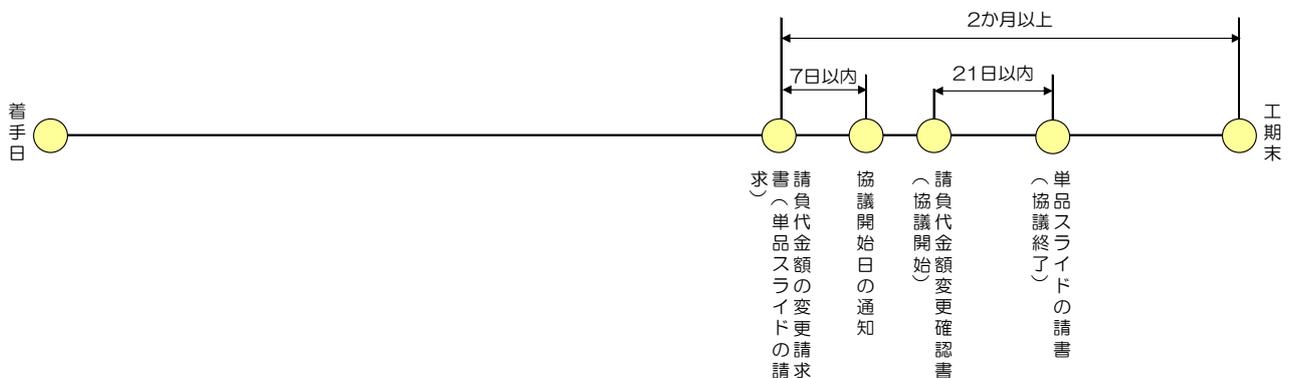
第5章 請求等手続き及び提出様式

5-1 請求時期

- 工期末の2か月前までに請求を行う。
- なお、請求を行った場合は、請求日に関わらず、着手日以降に調達した品目についてスライドの対象となる。

- 単品スライド条項の請求は、工期内に必要な協議期間及び契約変更手続きに要する期間が確保できるよう、工期末の2か月前までを原則とする
- 協議開始から協議終了までの期間として21日間を確保することが一般的であるが、工期末の直近で請求があった場合など十分な協議期間が確保できないことも考えられることから、協議期間については、発注者と請負人とが協議して、適切に措置する必要がある。

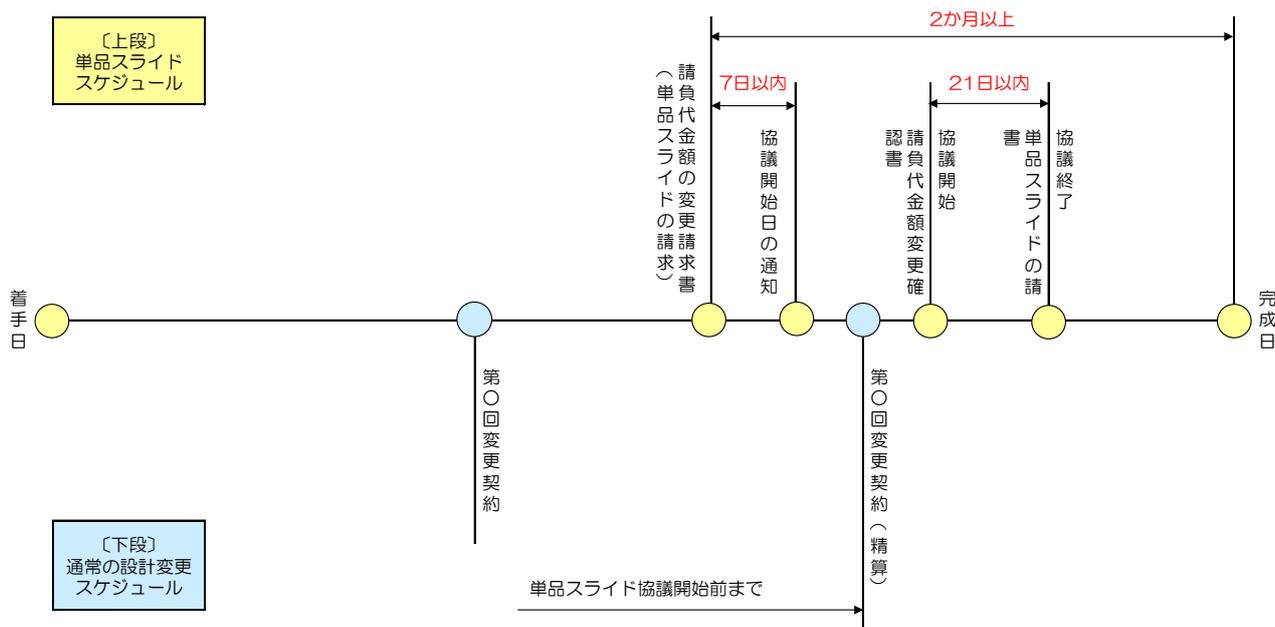
<単品スライド請求のスケジュール（イメージ）>



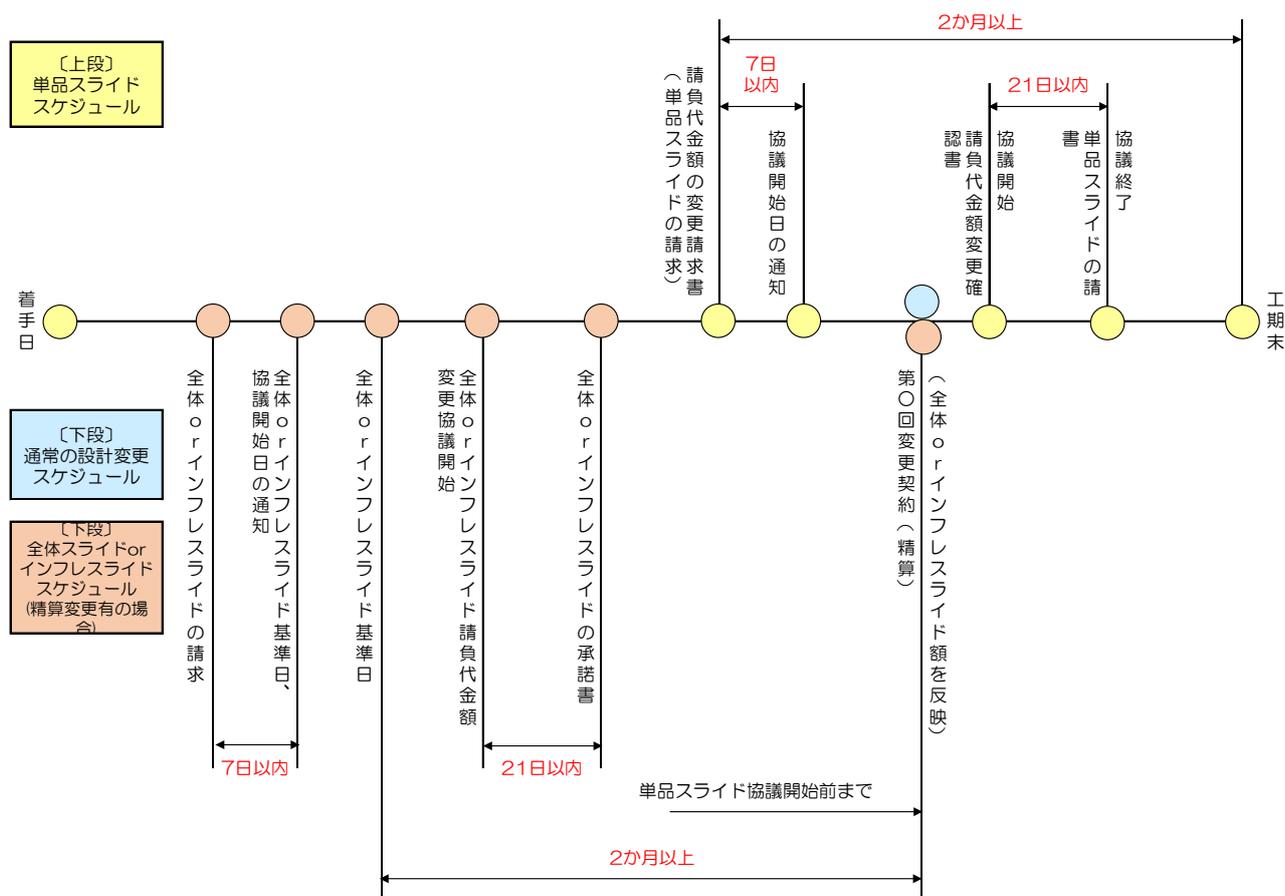
5-2 協議の手続き

- 単品スライド額の算定にあたって、「請負代金額・対象数量」は、「最終的な全体工事費・契約数量」をもって行うことが原則であることから、協議開始日までに、単品スライド分を除く精算変更（全体スライド及びインフレスライドを含む）をすること。（原則）
- その後、発注者と請負人とが協議して単品スライド額を確定し、契約により最終請負代金額を確定させる。

<単品スライドと通常的设计変更の関係（イメージ）>



<単品スライドと全体スライド又はインフレスライドの関係（イメージ）>



- しかしながら、最終的な数量の確定までに期間を要する場合などこれによりがたい場合も想定されるが、その場合は、請負人や発注者とも十分調整の上実施すること。

5-3 出来形部分検査

• 出来形部分検査時に、要請がある場合、単品スライド条項を適用することができる旨を記載するものとする。

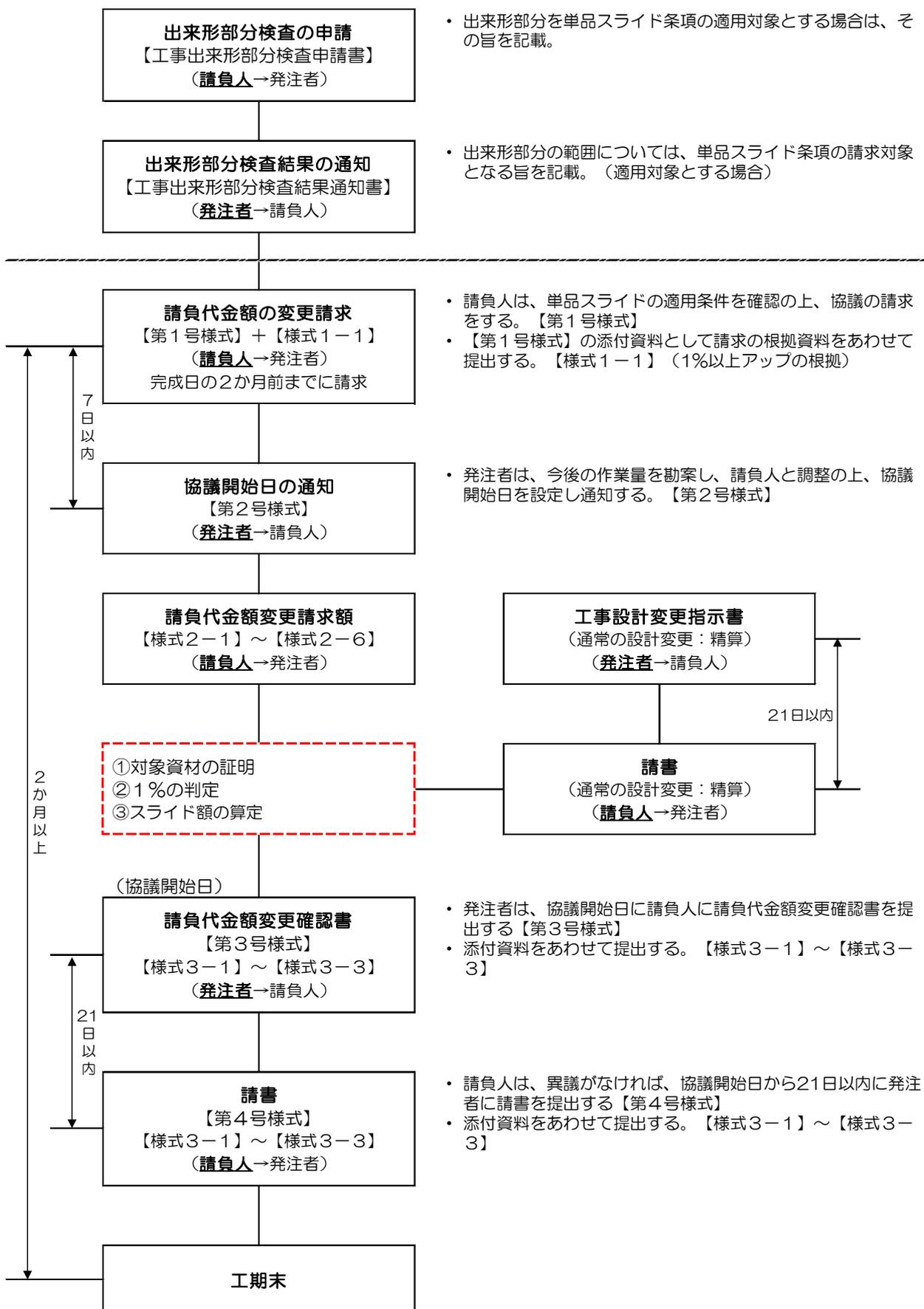
- 材料単価の価格変動に伴って、当該工事の請負代金額が不相当となる恐れがある場合は、工事出来形部分検査の申請と、同時もしくは事前に、工事請負契約約款第26条第5項の請求を行うことで、当該検査の出来形部分も条項適用対象とできる。
- 出来形部分検査を実施する場合は、出来形部分の確認を発注者に請求する際、その旨を「工事出来形部分検査申請書」に併せて記載する。（記載例：今回、申請する工事の出来形部分の範囲については、横浜市工事請負契約約款第26条第5項の請求対象とすることを併せて要請します。）
- また、発注者は工事出来形部分検査調結果通知書に単品スライド条項の請求対象となる旨を記載する。（記載例：工事出来形部分検査で確認した出来形部分の範囲については、横浜市工事請負契約約款第26条第5項の請求対象とします。）
- なお、その場合、以降の工事は単品スライド条項の請求対象となる。（それ以降の工事出来形部分検査結果通知書に単品スライド条項の請求対象となる旨を記載する）

5-4 部分引渡しにかかる指定部分の取り扱い

• 部分引渡しを行う「指定部分」は、指定部分の工期の2か月前までに請求。

- 部分引渡しを行う指定部分については、その部分のみを対象に単品スライド条項が適用されるため、指定部分の工期2か月前までに単品スライド請求を行う。

単品スライド条項にかかる実施フロー及び様式



単品スライド条項取扱要綱に定められている様式

第1号様式（第10条第1項）

年 月 日

横 浜 市 長
横浜市水道事業管理者
横浜市交通事業管理者

所 在 地
（請負人）商号又は名称
代表者職氏名

工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額の変更請求書

現在施工中の次の工事について、契約当初に比べて工期内に主要な工事材料の価格に変更が生じたので、工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額変更について、請負代金額変更請求額概算計算書を添えて請求します。

- 1 契約番号
- 2 工事件名
- 3 工 期 年 月 日から 年 月 日まで
- 4 請負代金額
- 5 変更請求概算額

（備考）

製造請負に係る契約にあつては、「工事請負契約約款第26条第5項」とあるのは「製造請負契約約款第25条第5項」と読み替えるものとする。

第1号様式の1（第10条の1第1項第1号）

第 号
年 月 日

（請負人）

様

横 浜 市 長
横浜市水道事業管理者
横浜市交通事業管理者

工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額の変更請求書

現在施工中の次の工事について、契約当初に比べて工期内に主要な工事材料の価格に変更が生じたので、工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額変更について、スライド額を算定した資料を添えて請求します。

- 1 契約番号
- 2 工事件名
- 3 工 期 年 月 日から 年 月 日まで
- 4 請負代金額
- 5 変更請求概算額

（備考）

製造請負に係る契約にあつては、「工事請負契約約款第26条第5項」とあるのは「製造請負契約約款第25条第5項」と読み替えるものとする。

第2号様式（第10条第5項）

第 号
年 月 日

（請負人）

様

横 浜 市 長
横浜市水道事業管理者
横浜市交通事業管理者

工事請負契約約款第26条第8項の規定に基づく協議開始日について（通知）

年 月 日付けで請求のあった次の案件の「工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額の変更請求書」について、工事請負契約約款第26条第8項の規定に基づき、スライド額協議開始日を通知します。

- 1 契約番号
- 2 工事件名
- 3 工 期 年 月 日から 年 月 日まで
- 4 請負代金額
- 5 スライド額協議開始日 年 月 日

（備考）

製造請負に係る契約にあつては、「工事請負契約約款第26条第5項」とあるのは「製造請負契約約款第25条第5項」と、「工事請負契約約款第26条第8項」とあるのは「製造請負契約約款第25条第8項」と読み替えるものとする。

第2号様式の1（第10条の1第1項第3号）

第 号
年 月 日

（請負人）

様

横 浜 市 長
横浜市水道事業管理者
横浜市交通事業管理者

工事請負契約約款第26条第8項の規定に基づく協議開始日について（通知）

年 月 日に請求を行った次の案件の「工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額の変更請求書」について、工事請負契約約款第26条第8項の規定に基づき、スライド額協議開始日を通知します。

- 1 契約番号
- 2 工事件名
- 3 工 期 年 月 日から 年 月 日まで
- 4 請負代金額
- 5 スライド額協議開始日 年 月 日

（備考）

製造請負に係る契約にあつては、「工事請負契約約款第26条第5項」とあるのは「製造請負契約約款第25条第5項」と、「工事請負契約約款第26条第8項」とあるのは「製造請負契約約款第25条第8項」と読み替えるものとする。

（請負人）

様

横 浜 市 長
横浜市水道事業管理者
横浜市交通事業管理者

工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額変更確認書

契 約 番 号	
工 事 名	
工 事 場 所	
契 約 年 月 日	

当該工事について、工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額の変更を確認します。

異存がなければ、請書を提出して下さい。

変 更 項 目	既 定	変 更
請負代金額	円 うち消費税及び地方消費税の額 円	円 うち消費税及び地方消費税の額 円
スライド変更金額		円 うち消費税及び地方消費税の額 円
対象材料内訳書	別添内訳書のとおり	
スライド調書	別添調書のとおり	
備 考		

- 1 製造請負に係る契約にあつては、「工事請負契約約款第26条第5項」とあるのは「製造請負契約約款第25条第5項」と読み替えるものとする。

第4号様式（第13条第1項）

請 書

（工事請負契約約款第26条第5項関係）

年 月 日

横 浜 市 長
 横浜市水道事業管理者
 横浜市交通事業管理者

所 在 地
 請負人 商号又は名称
 代表者職氏名

工 事 名	
契 約 年 月 日	

標記請負契約の工事請負契約約款第26条第5項の規定に基づく請負代金額の変更について、次の事項を確認のうえ請書を提出します。

記

○確認事項

対象材料内訳書	添付の内訳書記載のとおり
スライド調書	添付の調書記載のとおり
スライド変更金額 (契約金額増△減)	円 うち消費税及び地方消費税の額 円

- 1 製造請負に係る契約にあつては、「工事請負契約約款第26条第5項」とあるのは「製造請負契約約款第25条第5項」と読み替えるものとする。

単品スライド条項に係る参考様式

【様式 3 - 2】

ス ラ イ ド 調 書

工 事 名	
I 単品スライド前 請負代金額 (様式 3 - 3 の①参照)	円 うち取引に係る消費税及び地方消費税の額 円
II 単品スライド対象 請負代金額 (様式 3 - 3 の③参照)	円 うち取引に係る消費税及び地方消費税の額 円
III 単品スライド額 (S) (様式 3 - 3 の⑧参照)	円 うち取引に係る消費税及び地方消費税の額 円
IV 単品スライド後 請負代金額 (I + III)	円 うち取引に係る消費税及び地方消費税の額 円

※ 主要な工事材料に係る価格の変動に連動して共通仮設費、現場管理費及び一般管理費等の変更は行いません。

単品スライド条項に係る参考様式（様式1-1～様式2-6の記載例）

横浜市 長
 横浜市水道事業管理者
 横浜市交通事業管理者

商号又は名称
 請負人
 代表者職氏名

請負代金額変更請求概算計算書

工事請負契約約款第26条第5項（製造請負契約約款第25条第5項）に基づく請負代金額の変更請求額の内訳は、次のとおりです。

工事名 **●●工事**

①請負代金				00,000,000		②出来形部分出来高金額				000,000	
③単品スライド対象の請負金額(①-②)				00,000,000		④単品スライド対象の請負金額の1%(③×1/100)				0,000,000	
品目	規格	単位	数量	当初単価	当初想定金額	購入単価	購入金額	購入年月	差額	備考	
○鋼	○	t	00.0	00,000	000,000	00,000	000,000	年 月	000,000		
○鋼	○	t	00.0	00,000	000,000	00,000	000,000	年 月	000,000		
			000.0	00,000	0,000,000	00,000	0,000,000		0,000,000	年 月 計	
○鋼	○	t	00.0	00,000	000,000	00,000	000,000	年 月	000,000		
○鋼	○	t	00.0	00,000	000,000	00,000	000,000	年 月	000,000		
			000.0	00,000	0,000,000	00,000	0,000,000		0,000,000	年 月 計	
○鋼 計	○	t	000.0	00,000	0,000,000	00,000	0,000,000		0,000,000	○鋼合計	
鋼材類 合計						0,000,000		0,000,000		0,000,000	④を超える額
□油	○	L	000	00.0	00,000	0.00	00,000	年 月	000,000		
□油	○	L	000	00.0	00,000	0.00	00,000	年 月	000,000		
			0,000	00.0	000,000	0.00	000,000		000,000	年 月 計	
□油 計	○	L	0,000	00.0	000,000	0.00	000,000		000,000	□油合計	
△油	○	L	000	00.0	00,000	0.00	00,000	年 月	000,000		
△油	○	L	000	00.0	00,000	0.00	00,000	年 月	000,000		
			0,000	00.0	000,000	0.00	000,000		000,000	年 月 計	
△油 計	○	L	0,000	00.0	000,000	0.00	000,000		000,000	△油合計	
燃料油 合計						000,000		000,000		000,000	④を超える額
変動額									0,000,000		
単品スライド請求額									0,000,000		

(注)

1. 購入先、購入単価、購入数量等を証明できる場合は、その資料（納品書等）を添付の上、併せて監督員に提出すること。証明できない場合は、概算数量を記載の上、その算出根拠を記した書類を提出すること。
2. 対象材料は、品目毎および購入年月毎にとりまとめるものとする。なお、とりまとめ数量欄が足りない場合は、複数枚になってもよい。
3. 変動額から請負人の負担額を差し引いて、単品スライド請求額を算出する計算過程を、別紙に記載すること。
4. 詳細に数量計算が出来る場合は、様式2-1を用いてもよい。

横 浜 市 長
 横浜市水道事業管理者
 横浜市交通事業管理者

商号又は名称
 請負人
 代表者職氏名

請負代金額変更請求額計算書

工事請負契約約款第 26 条第 5 項 (製造請負契約約款第 25 条第 5 項) に基づく請負代金額の変更請求額の内訳は、次のとおりです。

工 事 名 **●●工事**

①請負代金				00,000,000		②出来形部分出来高金額				000,000
③単品スライド対象の請負金額(①-②)				00,000,000		④単品スライド対象の請負金額の 1% (③×1/100)				0,000,000
品目	規格	単位	数量	当初単価	当初想定金額	購入単価	購入金額	購入年月	差額	備考
○鋼	○	t	00.0	00,000	000,000	00,000	000,000	年 月	000,000	
○鋼	○	t	00.0	00,000	000,000	00,000	000,000	年 月	000,000	
			000.0	00,000	0,000,000	00,000	0,000,000		0,000,000	年 月 計
○鋼	○	t	00.0	00,000	000,000	00,000	000,000	年 月	000,000	
○鋼	○	t	00.0	00,000	000,000	00,000	000,000	年 月	000,000	
			000.0	00,000	0,000,000	00,000	0,000,000		0,000,000	年 月 計
○鋼 計	○	t	000.0	00,000	0,000,000	00,000	0,000,000		0,000,000	○鋼合計
鋼材類 合計						0,000,000		0,000,000	0,000,000	④を超える額
□油	○	L	000	00.0	00,000	0.00	00,000	年 月	000,000	
□油	○	L	000	00.0	00,000	0.00	00,000	年 月	000,000	
			0,000	00.0	000,000	0.00	000,000		000,000	年 月 計
□油 計	○	L	0,000	00.0	000,000	0.00	000,000		000,000	□油合計
△油	○	L	000	00.0	00,000	0.00	00,000	年 月	000,000	
△油	○	L	000	00.0	00,000	0.00	00,000	年 月	000,000	
			0,000	00.0	000,000	0.00	000,000		000,000	年 月 計
△油 計	○	L	0,000	00.0	000,000	0.00	000,000		000,000	△油合計
燃料油 合計						000,000		000,000	000,000	④を超える額
変動額									0,000,000	
単品スライド請求額									0,000,000	

(注)

1. 購入先、購入単価、購入数量等を証明できる場合は、その資料(納品書等)を添付の上、併せて監督員に提出すること。証明できない場合は、概算数量を記載の上、その算出根拠を記した書類を提出すること。
2. 対象材料は、品目毎および購入年月毎にとりまとめるものとする。なお、とりまとめ数量欄が足りない場合は、複数枚になってもよい。同一の品目で同一年月でも複数の単価がある場合や購入先が異なる場合は、区分するものとする。
3. 変動額から請負人の負担額を差し引いて、単品スライド請求額を算出する計算過程を、別紙に記載すること。

単品スライド条項に係る出来形部分検査の参考様式

工事出来形部分検査申請書

年 月 日

(工事監督課・事務所)

請負人 (社名)

現場代理人氏名

横浜市工事請負契約約款第 38 条の規定により、工事の出来形部分の検査を申請します。

今回、申請する工事の出来形部分の範囲については、横浜市工事請負契約約款第 26 条第 5 項の協議の対象とすることを併せて申請します。

工 事 名	
工 事 場 所	
完 成 期 限	年 月 日
出来形部分検査 希 望 年 月 日	年 月 日

総括監督員	主任監督員	担 当 監 督 員

工事出来形部分検査結果通知書

第 号
年 月 日

(請負人) +

様

横浜市〇〇局長

次の工事は、検査の結果、出来形部分の完成を確認しましたので通知します。

契約工事名			
契約年月日	年 月 日	完成年月日	年 月 日
部分完成年月日	年 月 日		

工事出来形部分検査で確認した出来形部分の範囲については、横浜市工事請負契約約款第26条第5項の協議の対象とします。

<連絡先>

局 課
電話 ()

単品スライド額選定の考え方 概略フロー

増額変更の場合の例

(参考) 対象品目及び材料

請負人
 単品スライド
 (必要な情報、資料等)
 ・対象品目、対象材料
 ・変更請求概算額
 ・材料毎に対象数量、搬入・購入等の時期、購入先、単価・購入価格及び、それが証明できる納品書、請求書、領収書

区分	品目	材料
鋼材類	鋼材類	H形鋼、異形棒鋼、厚板、鋼矢板、鉄鋼二次製品、ガードレール、スクラップ等(貴料や損料も対象とすることが可能)
燃料油	燃料油	ガソリン、軽油、混合油、重油、灯油
その他 工事材 料	コンクリート類	レディーミクストコンクリート(生コン)、セメント、モルタル、コンクリート混和材、コンクリート用骨材、コンクリート二次製品等
	アスファルト類	アスファルト混合物、アスファルト乳剤、ストレートアスファルト、改質アスファルト等
	その他主要な 工事材料	上記以外の主要な工事材料が対象



発注者
 「実勢価格に基づく変動後の金額」と「実際の購入金額」を比較
 ▶ **品目毎の合計金額**で比較する(材料毎の比較は行わない)
 ① 実勢価格に基づく**変動後の金額(品目毎の合計金額)**
 ② 実際の購入金額(**品目毎の合計金額**)



「① 実勢価格に基づく変動後の金額」が安価となる品目

「② 実際の購入金額」が安価となる品目

発注者
 実勢価格にて品目毎の変動額を算出

発注者
 実際の購入金額にて品目毎の変動額を算出



発注者
 品目毎の変動額が請負代金額*の1%を超えるかを確認
 (品目の一部の材料について実際の購入金額を用いて確認することも可)

発注者
 品目毎の変動額が請負代金額*の1%を超えるかを確認

↓ 変動額が請負代金額*の1%を超える品目



↓ 変動額が請負代金額*の1%を超える品目



発注者
 実勢価格にてスライド額を算定

変動額が請負代金額*の1%を超えない品目は単品スライドの対象外

発注者
 実際の購入金額にてスライド額を算定

変動額が請負代金額*の1%を超えない品目は単品スライドの対象外



請負人から実際の購入金額でスライド額を算出することを希望する旨の申し出があった場合

申出のあった材料毎にスライド額を「実際の購入金額」にて算出するか「実勢価格」にて算出するかを確認

※ 部分払をした工事における「請負代金額」は出来形部分に相応する請負代金額を控除した額

具体的なフロー図は次ページ参照

実際の購入金額の確認フロー

請負人

- 実際の購入金額でのスライド額算定を希望
 - ・対象品目及び対象材料を申出*
 - ・実購入先を含まない2社以上の見積り提出*
 - 「実際の購入金額の単価」が「実勢価格（落札率（単価合意比率））」以上となることを請負人にて確認

（補足）見積りについて

- 工期内の代表的な月（1か月以上）とする

※ 単品スライドの請求時にあわせて提出

第1段階

発注者

- 請負人から提出された見積りから「地域の材料価格の傾向」と「実際の購入金額での検討」を行うことの妥当性を確認

<チェック項目>

- 対象材料ごとに以下を確認
 - ・「現場に搬入された月もしくは購入した月」のうち、代表的な月（1か月以上）の単価で確認
 - 「実際の購入金額の単価」と2社以上の「見積り単価」を比較し、「実際の購入金額の単価」が最も安価となる

「実際の購入金額の単価」が最も安価とならない材料



実勢価格にて算出

- 実購入先の当該材料の価格変動は社会（もしくは地域）全体としてのものではない。

第2段階

「実際の購入金額の単価」が最も安価となる材料

発注者

- 「実際の購入金額」の「実勢価格」からの乖離の程度を確認

<チェック項目>

- ①が②以内であることを確認
 - ①「実際の購入金額の単価」（複数月に渡って搬入している場合は、購入単価の加重平均）
 - ②「実勢価格の単価（落札率（単価合意比率））+30%」（複数月に渡って搬入している場合は、実勢価格の単価（落札率（単価合意比率））の加重平均+30%）
- ①が②を上回る場合、特別に考慮すべき価格変動要因がないかを確認

<確認方法> 各発注者の判断による

- 1) 発注者による見積り徴収
- 2) 近隣工事における材料調達状況
- 3) 特別調査で設定した単価の場合、調査機関へのヒアリング等

実際の購入金額の妥当性が確認できない



実勢価格にて算出

（実勢価格の単価（落札率（単価合意比率））の+30%は発注者として妥当性を確認するためのものであり、+30%を超えても妥当性が確認されれば採用可能）



実際の購入金額の妥当性が確認できる

実際の購入金額にて算出

- ①が②以内の場合、実際の購入金額の単価は概ね材料価格の上昇傾向と合致しているため、妥当と判断
- ①が②を上回る場合、実際の購入金額の単価が妥当であることが発注者が入手できる情報・資料から確認できる